

中
村
公
園

河
童
聞
き
書
き
（
洪
水
篇
）

皆さん、またまた河童の登場じゃ。前は
地震のお話をしたが、地面が揺れるのはどう
も苦手なんじゃ。今回は、得意な水のお話じ
や。嘉永三年（一八五〇）と安政二年（一八
五五）に大きな洪水があったんじゃ。河童が
得意な水も、人間にとっては大きな脅威とな
ることがあるんじゃ。今回も当時の様子を奥
村得義が話してくれたので、皆さんにお聞か
せするんじゃ。参考にして災害に備えて下さ
れば幸いじゃ。

まずは嘉永三年（一八五〇）のお話じゃ。
嘉永三年（一八五〇）、秋の初めまで気候が
良くて作物もよく育ち、七月中頃の様子なら
昨年同様米の出来も良いはずじゃった。秋の
収穫が終われば一両で七、八斗（十斗で一石）
の米相場となり、これなら白米一升が百文に
なると商人も町の者たちも喜んでいたんじゃ。
ところ、七月二十一日午の刻（午前十一時）
を過ぎる頃、急に強い東風が吹き始め、綿の

ような薄黒い雲が戌亥（北西）の方角に流れ
て行ったんじゃ。東風がその頃よく吹いてい
たんじゃ。西風の吹く季節なのに、これでは
作物に良くない。人々は話していたんじゃ。
二十日の夕方には、辰巳（南東）の空から戌
亥（北西）の空へ向かって、白髪のかずらを
延ばしたような雲が棚引いていたんじゃ。こ
れは上空で強い東風が吹いている兆しだった
かもしれないのじゃ。暮六ツ（午後六時）を過
ぎる頃から雨も降り始め、戌の刻（午後七時）

か
ら
い
っ
そ
う
風
が
強
ま
り
、
亥
の
刻
（
午
後
九
時
）
に
は
暴
風
と
な
っ
た
ん
じ
ゃ
。我
が
家
の
東
側
の
庭
は
、
三
河
ま
で
も
一
望
で
き
る
ほ
ど
眺
め
が
良
か
っ
た
ん
じ
ゃ
。小
さ
な
木
を
植
え
、
風
を
防
い
で
い
た
が
、
そ
の
葉
を
も
ぎ
取
り
、
枝
を
折
る
音
が
、
打
ち
寄
せ
る
波
音
よ
り
も
大
き
く
響
い
て
い
た
ん
じ
ゃ
。災
害
に
備
え
て
用
心
し
て
い
る
つ
も
り
で
は
あ
っ
た
が
、
何
分
小
さ
な
家
な
の
で
、メ
キ
リ
メ
キ
リ
と
音
が
す
る
度
に
、吹
き
つ
ぶ
さ
れ
る
か
と
怖
く
な
っ
た
ん
じ
ゃ
。丑
の
刻
（
午
前
一
時
）
頃
に
は
下
弦
の
月

も現れ、空は明るくなつたが、雨は降り続い
ていたんじゃない。辺りの瓦を吹き飛ばす音も聞
こえてきたが、どうするともできなかつた
んじゃない。その夜は家のことを心配しながら夜
を明かしたんじゃない。二十二日朝、急いで城内
を見回り、報告したんじゃない。城内の木は思つ
たほどの被害はなく、大小合わせて十本ほど
の木が倒れているだけじゃつた。小納戸の持
場の内上下御深井では、御庭向から御屋敷ま
でで合わせて三十本ほどの木が被害が遭つた

とのことじゃ。三之丸御宮（東照宮）本地堂の北にある大きな杉の木が倒れ、御瑞垣の巽（南東）側を壊してしまったんじゃ。三之丸御土居は壊れ、折れた松の木が十五本ほどあったんじゃ。これは御作事方の受け持ちじゃ。つた。天保八酉（一八三七）年にあつた大風に比べる、風の吹いていた時間が短かった。ので倒れた木も少なかったようじゃ。しかし、塀や家の壁は土が流れ落ちた所が多く、屋根の瓦やこけらもたくさん吹き飛ばされていた。

んじや。榎多土戸内塩蔵の軒が折れた木で壊
されたほかに大きな被害は城内になかったん
じや。二十四日、御城代下条庄右衛門殿が天
守を調べられたんじや。すると三重目より下
の東側にある部屋では雨漏りがし、側板縁か
ら畳の間までビタビタになっっていたそうじや。
天保八酉（一八三七）・弘化四未（一八四七）
の大雨でもなかつたことじや。これは付け屋
根と云う小さい屋根の窓から入った雨だと人
々は言っていたが、わしはそうとは思えなか

い た ん じ や 。 こ れ ま で は 工 事 な ど の 仕 事 も 全	合 八 勺 （ 約 一 ・ 二 リ ッ ト ル ） が 売 値 に な っ て	か ら さ ら に 高 く な り 、 こ の 日 は 百 文 で 白 米 六	や 。 こ の 年 は 春 か ら 米 の 値 段 が 高 く 、 盆 前 後	々 で 、 日 雇 い を 雇 う に も 人 が い な か っ た ん じ	っ た ん じ や 。 重 臣 た ち の 屋 敷 の 被 害 は 軽 重 様	は ず じ や 。 御 城 下 で は 被 害 の な い 場 所 は な か	う ん じ や 。 あ る い は 雨 が 漏 っ た 箇 所 が あ っ た	か い 雨 露 が 長 い 時 間 で こ う な っ た と わ し は 思	っ た ん じ や 。 窓 や 戸 の 隙 間 か ら 吹 き 込 ん だ 細
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

くなく、大工たちは暇を持て余していたが、この暴風で大忙しになっていたんじゃない。田畑には大した被害はなかったんじゃない。尾張は大丈夫だった。が、三河では、崎矢作川の橋が一間（約一、八メートル）流されてしまった。間（約一、八メートル）流されてしまった。じゃ。そこから宿場の方へ渡って行くと、町に入っても水は深く、ある材木屋では家にあつた物が残らず流されてしまった。たのこのこと。土蔵も流され、家だけが残っていた。と。じゃ。天龍川上流では山崩れが起き、村里が

流されてしまったそうじゃ。
八月六日未の刻（午後一時）頃より雨が降
り始め、夜になると激しくなり、洪水となつ
たんじや。雨はやむことなく一晩中降り続い
たんじや。六日夜には庄内川は八合の水とな
ったんじや。知らせが入り、役人たちは夜中
に出掛けたんじや。七日の明け方になつて、
矢田川の水が瀬古村に流れ込んだんじや。庄
内川の水も味鏡村へ流れ込み、新川へと抜け
て行つたんじや。庄内川洗堰の下流辺りから

新川の水は比良村へ流れ込み、小田井の三郷
は海のようになっ
てしまっ
たんじや。
田には
水があふれ、家はひさしまで水に浸かっ
たん
じや。
新川に水を流し出
すため堤防を切り崩
したんじや。
新川の源の比良から北へと渡る
土橋と平田橋と
いう土橋が流れ落ち、土器野
新田の往還通出町の西にある大橋に引
つ掛か
つ
たんじや。
橋が揺れ、片側がねじれ傾いた
ので、橋の通行を止めたんじや。
水が瀬古輪
中から流れ出ると、小田井川には戸障子や家

具が流れていたそうじゃ。天白川の水は中根
村へ流れ込み、笠寺観音前から東坂下の出屋
敷までは、床上二尺（約六十センチ）までの
水になった。そうじゃ。熱田築出へ水が流れ込
み、八丁縄手を船で越さなければならなかつ
た。そうじゃ。これは古渡東の水が流れ、たま
ったものなんじゃろう。
八日朝から昼前にかけて激しい雨で大水だ
ったんじや。堀端の水筒から城の天下馬の東
へ水があふれ、石垣が十間（約十八メートル）

崩れたんじゃ。昼前近くのことだそうじゃ。
古渡山の内、我が家より北東の家では井戸に
水が入り、満杯となった井戸が多かったんじ
や。古渡より東を見ると、高田村西下の田畑
は水を白くたたえていたそうじゃ。稲穂が水
に浸かりながら流れていたので、遠くから見
るとこのように見える、まるで海のようだった
そうじゃ。この水は八丁縄手へと流れて行っ
たんじゃ。小田井輪中へ水が流れ込むのは七
十二年振りじゃ。岡崎西ノ町へ水が流れ込む

のは三十三年振りだそうじゃ。岡崎では矢作
橋の北にある阿弥陀堂という所で、村が丸ごと
と流されてしまったそうじゃ。
九日に聞いた話じゃ。この日は昼過ぎから
降り始めた雨は一晩中降っていたんじゃ。古
渡東懸所へ東本願寺別院の下から御器所へ
向かう通りには、北から水が流れてきたそう
じゃ。流れてきた水もひき、その勢いで壊れ
た切戸も修理を終えたと話していたそうじゃ。
しかし、熱田の八丁縄手では水がまだ絶え間

ん　切　き　遣　れ　る　し　か　渡　な　く
じ　り　場　わ　は　で　た　ら　ら　く
ゃ　崩　所　さ　違　合　そ　牛　な　流
。　し　を　れ　い　戦　う　立　け　れ
そ　な　切　、　切　の　じ　へ　れ　落
う　が　り　双　と　よ　と　ば　ち
し　ら　崩　方　言　う　、　な　て
な　水　す　の　い　だ　す　水　ら　お
い　を　も　庄　、　る　を　な　り　、
と　流　の　屋　百　と　除　か　行
争　し　が　姓　そ　く　っ　く
い　落　立　が　う　た　た　そ　に
の　と　会　願　じ　か　う　う　は
元　す　い　い　や　ら　じ　深
と　こ　の　出　。　騒　防　や　い
な　と　下　る　そ　ぎ　を　。　水
る　が　の　と　も　出　し　切　の
ん　大　村　役　、　り　中
じ　切　へ　人　ま　崩　野　を
ゃ　な　と　が　こ　ま　を
。

牛立の騒ぎはこの手順を踏まなかつたのが原
因と思われるんじゃない。
同じ日の昼過ぎ、今朝の見回りの報告によ
ると、三之丸天主裏御堀では、石垣が十二間
（約二十一メートル）ほど壊れていたそうじ
や。巾下御門枡形切通しの御土居は土台の漆
喰が崩れ、そのため御土居も少し崩れ落ちた
そうじゃ。御園御門枡形の御土居は、橋台よ
り東側に欠けた箇所があつたそうじゃ。外片
端通りは、久屋町の先辺りで道中より北側が

五寸（約十五センチ）ほど沈んでいたそうじ
や。しかし、堀の方は何ともなかったそうじ
や。ただし、今月六日夜通し降った大雨で、
本町大手橋台西側の玉縁（たまぶち・柵）が
欠け落ち、石垣が西側へ転がり落ちていたん
じゃ。その通りを西へ行った所でも玉縁が二
ヶ所欠け落ちていたんじゃ。御園御門橋台は
東西二ヶ所欠け落ちていたんじゃ。この四ヶ
所は七日の朝に見つかったものなのじゃ。
十日の噂じゃ。この日は辰中刻（午前八時）

より雨が降り始めていたんじゃない。川の増水の
ため大代官方では下役人まで全員が出払い、
いまだ誰も戻っていないとのことじゃ。詳し
くは分からないが、庄内川は瀬古・味鋤・比
良村で堤防が決壊し、人々が屋根に上って「
助けてくれ、助けてくれ。」と叫んでいたそう
じゃ。天白川でも堤防が決壊したそうじゃ。
新川には家が流れてきたそうじゃ。その家が
橋に引っ掛かり、橋がねじれ通行が禁止され
たそうじゃ。辺りでは溺れ死んだ者も多く、

水に浮かんでいたそうじゃ。また新川は西へ
と阿原村で、五条川は一ヶ所今宿村で一ヶ所
下之郷村で、堤防が決壊したそうじゃ。
同じ日、高い地にある畑の木綿は二十一日
の風で倒れ、低い地にある畑の木綿は水に浸
かって花も実も腐り、この年の種の収穫は難
しいとのことじゃった。近くのお寡婦の小春が、
種のついた綿を買い求めようとしたが売って
もらえなかつたそうじゃ。その夜本町通りに
出て見ると、よりあめ一把十匁（約三十七グ

ラム）を五十六文で売っていたそうじゃ。それを買い求めようと、女たちが集まっていた。そうじゃ。これは鍛冶屋文助の娘が分家した所だそうじゃ。ここも十一日の夜は売ってはおらず、表に十人ほどの女たちが集まり途方に暮れていたそうじゃ。この時白米六合五勺（約一、二リットル）が百文だそうじゃ。瀬古へ向かうと、山田の渡しは水の勢いが強い上に船もなく、そこから堤防を少

し西に行くのと船があつたそうじゃ。ちようど御徒目付の見回りで、しばらく待ち合わせたそうじゃ。その後船で石山寺の門前まで乗りつけ、一尺（約三十センチ）もある水の中を渡り庫裏へ上つたそうじゃ。庫裏は文政年間、に建て替え、特に高く築いていたんじゃ。しかし、水が一番多い時には、畳がひたひたになり、縁側との境まで水がついていたそうじゃ。それでも村中の人々がやって来ていたそうじゃ。や。九日になつても、たぐさんの女や子供がそ

こに残っていたそうじゃ。命あつての物種と
住職は話していたそうじゃ。本堂・観音堂は
床上一尺（約三十センチ）ほど水に浸かった
そうじゃ。墓はいまだ水に沈んだまま
じゃ。水野伴左衛門家の大きな碑は先が少し
だけ見え、水野与右衛門家の先祖の碑も同じ
だったそうじゃ。我が家の先祖の碑は水に沈
んでいたそうじゃ。憂うつな気分になつたん
じゃ。飲み水は山田から船で運んでいるそう
じゃ。

十二日の噂じゃ。小田井輪中流れ込んだ水を枇杷島川に排水するため、八ツ屋で堤防を切り崩そうとしたが、水が深く、人の力では十分に切り崩すことができなかったんじゃ。そうこうするうちに下流河原の堤防が新川へ押し崩され、そこから水が流れ出したそうじゃ。その切り崩した堤防にあった家二軒ほど流されたんじゃ。新川砂子橋は一部が流されたので佐屋街道の通行が止められたそうじゃ。後で聞いたところでは、秋江辺りでは、木曾。

川の水が高須輪中に流れ込んだそうじゃ。佐
屋川は影響がなかったそうじゃ。堤防の決壊
箇所はおよそ三百間（約五百五十メートル）
とこのことじゃ。いつのことはよく分からな
いが、佐屋川は鵜多須と津島の間辺りで堤防
が決壊したそうじゃ。最初は杭などを打たせ
て防いでいたが、やがて押し切られたそうじ
ゃ。指揮を執った役人や作業にあたった者の
行方は分からないそうじゃ。水の流れた先に
は寺があつたそうじゃ。危険を知らせる鐘が

三度打たれた後、辺りは静まり返り音がしな
かった。そうじゃ。一昨日十日には人がやって
来て、砂子を船で渡ったが、西南は海のよう
で進むことができなかった。藩の仕
事のためやって来てはいしたが、この様子を伝
えようと引き返した。そうじゃ。
地方勘定所は六日以来誰も帰ることにはせず、
村の堤防が南側で長さ五、六間（約九十メ
ートル）に渡って反り曲っていた。そうじゃ。

騒いでいるうちに瀬古始め所々で堤防が決壊
し、水が流れ出たので勢いが弱まり助かった
そうじゃ。もし水が流れ込んではいれれば上宿ま
で床上の浸水になったとこのことじゃ。味鋤辺
りに流れ込んだ水は、土器野を流れて南に抜
けて行ったそうじゃ。民家は屋根まで水に浸
かったり流されたりと哀れな様子だったそう
じゃ。どうやら九日夜の雨で増水していたか
らのようじゃ。九日には御加判生駒因州殿が
土器野往来筋の決壊箇所を船で渡られたそう

で、それを見た者が話していたことじゃ。東
は奥州・信州などでも、暴風で多くの人が亡
くになったそうじゃ。米なども売っておらず不
安だったそうじゃ。庄内川は川底に砂が高く
積もり、田は堤防より低かったんじゃ。川上
から流れ来た水は、味鉢村の決壊箇所から新
川へと抜け、その一方で枇杷島橋下流では、
いつもものように河原も出て水もなかつたそう
じゃ。十一日に聞いた話じゃ。

二十二日、土器野新田の者が話してくれた

と　こ　ろ　で　は　、　新　川　の　土　橋　は　街　道　一　重　要　な　橋　だ
が　、　川　上　の　比　良　と　平　田　の　土　橋　が　大　水　で　流　れ　落
ち　、　そ　の　流　れ　落　ち　た　橋　が　新　川　の　土　橋　に　引　っ　掛
か　っ　た　そ　う　じ　ゃ　。　そ　の　た　め　橋　は　半　分　傾　き　、　流
れ　落　ち　そ　う　に　な　っ　た　に　も　か　か　わ　ら　ず　、　そ　の　場
に　来　て　い　た　御　普　請　奉　行　服　部　喜　八　郎　は　逃　げ　帰　っ
て　し　ま　っ　た　そ　う　じ　ゃ　。　こ　の　よ　う　な　時　は　命　に　代
え　て　も　橋　を　守　る　べ　き　な　の　に　、　危　な　い　か　ら　と　逃
げ　出　す　と　は　ど　う　い　う　こ　と　な　ん　じ　ゃ　。　そ　の　後　配
下　の　役　人　の　指　図　で　落　ち　か　か　っ　た　橋　に　人　を　上　げ　、

引　　つ　　掛　　か　　っ　　て　　い　　る　　物　　を　　取　　り　　除　　い　　た　　の　　で　　橋　　は　　何
と　　か　　持　　ち　　こ　　た　　え　　た　　そ　　う　　じ　　や　　。　　し　　か　　し　　、　　北　　側　　が
ね　　じ　　れ　　て　　い　　た　　の　　で　　通　　る　　こ　　と　　は　　で　　き　　な　　か　　つ　　た　　そ
う　　じ　　や　　。　　昨　　日　　か　　ら　　修　　復　　工　　事　　が　　始　　ま　　つ　　た　　と　　の　　こ
と　　じ　　や　　。　　ま　　た　　七　　日　　の　　朝　　の　　こ　　と　　じ　　や　　。　　土　　器　　野　　の
処　　刑　　場　　辺　　り　　の　　松　　原　　は　　街　　道　　筋　　つ　　ま　　り　　堤　　防　　の　　上　　だ
つ　　た　　そ　　う　　じ　　や　　。　　そ　　こ　　は　　堤　　防　　が　　低　　く　　、　　北　　か　　ら　　水
が　　押　　し　　寄　　せ　　た　　際　　は　　街　　道　　の　　北　　端　　に　　土　　俵　　を　　三　　重　　に
置　　い　　た　　そ　　う　　じ　　や　　。　　し　　か　　し　　、　　そ　　れ　　さ　　え　　越　　え　　、　　少
し　　ず　　つ　　あ　　ふ　　れ　　た　　そ　　う　　じ　　や　　。　　も　　し　　こ　　こ　　で　　堤　　防　　が

決壊すれば下河原・中河原まで水に沈んでし
まうと、その村々から人が集まり土俵を置い
ていると、二ツ杵辺りから西の者がやって来
て、自分の家が北側から水をかぶり、家の中
を水が流れるのが悲しいと土俵を置かせない
よう騒ぐうちに、堤防が決壊してしまったそ
うじゃ。実は置いてある土俵を抜いたとも言
われていたそうじゃ。何分この騒動を押しと
どめるのは難しかった。さきに堤防
が決壊しようとした時、大声で危険が知

見 二 十 日 に 御 加 判 瀧 川 権 十 郎 殿 が 味 鋤 辺 り を
回 れ た そ う じ ゃ 。 そ の 際 、 肴 を 詰 め た 重 箱
さ れ て 全 員 死 ん で し ま っ た そ う じ ゃ 。
か っ た そ う じ ゃ 。 道 の 南 を 通 っ た 者 は 押 し 流
や 。 土 俵 を 置 い た 北 の 道 を 通 っ た 者 は 全 員 助
で 水 に 浸 か り な が ら 東 へ 東 へ と 走 っ た そ う じ
っ た そ う じ ゃ 。 身 の 危 険 を 感 じ 、 人 々 は 腰 ま
十 五 メ ー ト ル ー ば か り が 残 さ れ て い る だ け だ
難 し く な り 、 橋 詰 の 出 町 は わ ず か 半 町 (約 五
ら さ れ る と 西 で は 橋 が 落 ち 、 東 も 道 の 通 行 が

を 入 れ た 合 羽 籠 を 持 っ て こ ら れ 、 成 願 寺 村 に
置 い た 役 所 に 詰 め て い た 御 普 請 奉 行 小 池 良 次
郎 へ 贈 っ た そ う じ ゃ 。 良 次 郎 か ら そ の 辺 り で
仕 事 を す る 役 人 に 分 け 与 え ら れ た そ う じ ゃ 。
味 鋤 は 竹 腰 家 の 領 地 で 、 家 中 の 役 人 が 幕 な ど
を 張 っ て 詰 め て い た が 、 そ こ に も 分 け 与 え ら
れ た そ う じ ゃ 。 二 十 一 日 に 古 渡 村 に 課 せ ら れ
た 作 業 者 百 十 人 が 味 鋤 村 へ 出 掛 け た そ う じ ゃ 。
こ れ ら の 作 業 者 は 御 代 官 方 が 確 認 し た 上 で 御
普 請 方 へ と 渡 し 、 最 後 に 人 数 を 帳 面 に つ け た

そうじゃ。庄屋一人と組頭がついており、土俵の俵を車三台分ほど集め持参していたそうじゃ。縄などはおびただしい量だったそうじゃ。御普請方では作業者をそれぞれ現場に割り振っておるそうじゃ。堤防の決壊箇所では杭を堤防の通りに打ち並べて柵を作り、土俵を打ち込んで決壊箇所を浅くしたそうじゃ。二間（約三、六メートル）杭を打ち込み、土俵で埋めたそうじゃ。杭の上には柵を掛け、歩けるようにして土俵を打ち込んだそうじゃ。

川上から川の中へ向かって水の勢いを弱める
水刎（みずはね）・猿尾（さるお）を築き、
青松葉を流して引っ掛けていたそうじゃ。近
頃はたいいてい土俵を積んで流れをふさぐが、
川底が高くなっている、川通を掘って水
を流したそうじゃ。味鉢村の小牧街道の中を
西北に川筋を作ったので水が流れたそうじゃ。
如意村・豊場村へと流れ、蒲の溜め場（遊水
池）へ流れ落ちたそうじゃ。最近砂の中に埋
まった死体を三体掘り出したそうじゃ。水に

湿った麦を食べ、味鉢の村裏では多くの人が
死んだそうじゃ。腹を下して死んだこのこと
じゃ。被害にあった土地へ一人五日分の夫食
料（食事料）を御小納戸より下されたそうじ
や。御勘定所よりもいくらか下されたそうじ
や。大道寺侯が蔵に蓄えていた米穀・荒和布
（あらめ・海藻の一種・塩・味噌を船に積
み、被災者に届けたそうじゃ。もつとも自領
の者にだけだったそうじゃが。さしあたって
は、命が助かった者たちに飯を炊かせて与え

た　　そ　　う　　じ　　ゃ　　。　　御　　勘　　定　　奉　　行　　始　　め　　役　　人　　が　　世　　話　　を　　し　　
た　　そ　　う　　じ　　ゃ　　。　　下　　役　　は　　そ　　の　　準　　備　　を　　し　　た　　そ　　う　　じ　　ゃ　　。
私　　領　　で　　は　　領　　主　　よ　　り　　握　　り　　飯　　な　　ど　　を　　貰　　っ　　て　　い　　た　　そ　　
う　　じ　　ゃ　　。　　特　　に　　町　　々　　の　　裕　　福　　な　　家　　々　　で　　は　　合　　力　　（　　金　　
錢　　や　　物　　品　　の　　寄　　付　　）　　を　　集　　め　　、　　人　　を　　募　　っ　　て　　米　　・　　味　　
噌　　な　　ど　　を　　車　　で　　運　　び　　、　　そ　　れ　　を　　毎　　日　　の　　よ　　う　　に　　配　　り　　
歩　　い　　て　　い　　た　　そ　　う　　じ　　ゃ　　。　　と　　と　　も　　奇　　特　　な　　こ　　と　　じ　　ゃ　　。
　　土　　器　　野　　新　　田　　の　　庄　　屋　　代　　徳　　蔵　　の　　所　　で　　も　　被　　災　　し　　た　　
者　　十　　人　　ば　　か　　り　　が　　暮　　ら　　し　　て　　お　　り　　、　　日　　々　　の　　施　　し　　物　　
の　　お　　か　　げ　　で　　普　　通　　の　　者　　よ　　り　　良　　い　　食　　事　　に　　あ　　り　　つ　　い

ていたそうじゃ。しかし、施し物はいつもあ
るとは限らず、その時々と与えられるものな
ので、時にはひもじくなったり。そんな
時に施し物が届くと、分け与えられるのを待
つことなく勝手に手を出す姿はとて哀れな
光景だったそうじゃ。今は施し物で何とかな
るが、いつまで続くかわからず、その上家は
流されてしまい、松の木などに引っ掛けて
いたそうじゃ。住む家も着る服もなく、この
先寒くなればどうやっても暮らしていけばい

の かい や ら れ る と 話 し て い た そ う じ ゃ 。

島 橋 の た も と か ら 少 し 西 の 二 ツ 杵 に 家 を 建 て

て い な い 場 所 が 堤 防 に あ り 、 そ こ を 切 り 崩 し

て 流 れ 込 ん だ 水 を 流 し 出 す と 定 め ら れ て い た

ん じ ゃ 。

さ な か っ た の で 、 ど う し た こ と か と 人 々 は 話

し て い た ん じ ゃ 。

例 を 知 る 者 は な く 、 そ の 上 川 底 が 高 く な っ て

お り 、 た と え そ こ を 切 り 崩 し て も 水 を 庄 内 川

へ流し出すことは難しかったので、自ずと新
川だけに水を流し出したということだそうじ
や。
二十三日、町々へ被災し困窮した者たちが、
物を売りにたくさんやって来ていたそうじや。
十六日に光明寺村から新六がやって来たの
で聞いてみると、光明寺村の神明社裏から猿
尾を三町（約三百メートル）ほど築いていた
そうじや。堤防から八尺（約二、四メートル）
も下にあつたそうじや。その猿尾は中ほどが

水に沈み、根元と先だけ水面に出ていたそう、
じゃ。川島の村々はどんな様子かと尋ねると、
近年はどこも土台を高くし、その上に家を建
てているので水に沈むことはないそうじゃ。
いつの水ではどこまで水に浸かったかを見比
べて土台を築いているそうじゃ。近年、島で
は竹が実を付け、よそと同じように大きな竹
は枯れてしまったそうじゃ。そのためよそか
ら家が丸見えだったそうじゃ。円城寺より川
上で今にも堤防が決壊しそうだとこのことに、

村々で洪水に備えたが、何とか持ちこたえた
そうじゃ。美濃側もこの辺りは無事だったそ
うじゃ。木曾川の御囲堤と美濃側の堤を比べ
れば、かなり高さに差があったようじゃ。こ
の木曾川の堤防を高く丈夫に築いたのは、徳
義が八つか九つの頃と覚えておるんじゃ。多
額の費用が掛かったが無事完成することがで
き、この災害でその有り難さがわかったんじ
ゃ。木曾川にならい、庄内川も堤防を高く丈
夫に築けるよう幅を広げるそうじゃ。工事に

か かつたのはその後文化の年のことじゃ。木
曾 川の堤防は見分役加藤市之右衛門（御徒衆
の 市之右衛門は倅で嘉永の初めに隠居し、既
に 家督は三代目ゝが上意を受け築いたもんじ
や。 庄内川の堤防は見分役川合兵右衛門が上
意 を 受け 築いたものじゃ。 両人が御普請奉行
に 進言し、 殿に奏上されて出来上がったもの
じ ゃ。 両人の功績は明らかで賞賛されるべき
も ん じ ゃ。 木曾川の堤防を工事する際、御普
請 奉行の頭水野千之右衛門は尾張と他領で高

さに差をつけるべきでないと考えていたが、
加藤市之右衛門がその考えを押しさえて奏上を
望み、ついに事を成し遂げたんじゃないや。これは
若い頃に聞いたことじゃ。
二十一日比良村の住民森宇兵衛（代々苗字
帯刀、能拝観を許されており、天明四辰（一
七八四）新川開削の折、仮橋を架けた功績で
代々金一両を拝領。比良村橋守は平八、太蔵
はその息子で分家。平田橋守は兵左衛門、枇
杷島橋守は問屋市左衛門。この家には茶道の

古　　い　器　が　あ　っ　た　と　。　が　や　っ　て　来　た　の　で　話　を　す
る　と　、　比　良　村　か　ら　北　へ　架　け　た　土　橋　は　、　柱　に　白
鳥　貯　木　場　の　二　間　（　約　三　、　六　メ　ー　ト　ル　）　丸　太　三
本　を　継　ぎ　足　し　た　高　い　橋　だ　そ　う　じ　や　。　こ　の　橋　は　、
柱　の　上　に　桁　を　置　き　、　そ　の　上　に　両　岸　の　堤　防　か　ら
登　り　の　桁　を　架　け　て　か　す　が　い　で　締　め　、　の　せ　た　中
桁　の　上　に　は　丸　太　柵　を　横　に　並　べ　置　き　、　そ　の　上　に
土　を　か　け　て　あ　っ　た　そ　う　じ　や　。　七　日　の　朝　、　味　鉢
へ　と　水　が　流　れ　込　ん　だ　際　、　流　し　松　な　の　か　大　松　一
本　が　浮　か　ん　で　流　れ　て　来　た　そ　う　じ　や　。　勢　い　よ　く

三本継ぎの柱に引っ掛かり、柱がミシミシと
折れるや否や橋は真ん中から落ちてしまった
そうじゃ。その時向こう側から十二、三歳の
子ども二人が橋の上を走ってきたそうじゃ。
一人は無事渡ったが、もう一人は橋の流れ落
ちた箇所にはあまり、水中に逆様に落ちたてし
まいったそうじゃ。三十間（約五十四メートル）
ほど下流に浮き上がり、橋桁に手を掛け「助
けてくれ。」と叫ぶと、居合わせた泳ぎの達者
な者が助けに向かった。そうじゃ。同じように

橋の木に捕まり、「まず帯を解き、服を脱いで裸になれ。」と言つて子どもを助けようとした。そうじゃ。子どもは助けが来たので勇気付けた。そうじゃ。服を脱いで水の中へ流し、「自分の身代りになれ。」と言つた。そうじゃ。そう。するうちに泳ぎ達者な者が子どもに乗った。桁木をとらえ、「お前を今堤防の方まで押しやる。るので、強く抱き付いて絶対に手を離すな。」。と言ひ聞かせた。そうじゃ。力に任せて押し出す。すると、橋げたは子どもをのせたまま岸に向か

ったそうじゃ。子どもは素早く泳ぎ出し、堤
防に上がったそうじゃ。これは子どもが普段
から川遊びに親しみ、泳ぎが達者であつたか
ら出来たとのことじゃ。最初、親に息子が水
中に落ちたことを知らせようと呼び掛けたが、
家は遠く、水の音も大きかつたので聞こえな
かつたそうじゃ。その時太蔵が家の中にかけ
込み、家にあつた渋紙を工夫してルーブルへ
メガホンのようなものゝを作つて呼びかけた
んじゃ。すると遠くまで声が届き、親や人々

が 集 ま り 、 先 ほ ど の 話 と な っ た そ う じ ゃ 。
ー プ ル の 効 果 と は た い し た も ん じ ゃ 。 ま た 子
ど も の 勇 気 、 泳 ぎ の 達 者 な 者 の 行 い 、 三 人 と
も 褒 め ら れ て 当 然 の こ と じ ゃ 。 少 し す る と 橋
の 辺 り か ら 下 流 で 堤 防 を 水 が 乗 り 越 え 始 め 、
や が て 堤 防 が 決 壊 し 水 が 流 れ 込 ん だ そ う じ ゃ 。
こ の 水 は 、 土 器 野 新 田 街 道 の 松 原 を 南 へ 流 れ 、
中 河 原 ・ 下 河 原 へ と 流 れ 込 ん だ そ う じ ゃ 。 比
良 の 決 壊 箇 所 で は 一 面 に 砂 が 入 っ た が 、 こ こ
で は 砂 が 入 る こ と は な か っ た そ う じ ゃ 。 御 用

人遠山大膳殿は木曾路を江戸へ向かうことと
なつたが、所領が大野木にあるので枇杷島へ
と回り、比良の決壊箇所などを調べたんじや。
所領の百姓を呼び出し、色々と尋ねながら進
んで行つたんじや。江戸へ行けばお尋ねもあ
るかもしれないといと、様子を調べておくのはも
つともなことと思われたんじや。
雨が降つたんじや。
二十六日に知多郡横根村の宇平がやって来た

んじや。阿野を流れる境川には横根村まで堤
防があるそうじや。六日夜から洪水に備え村
中の曲がつていない木を全て切り出して杭を
作り、その杭を堤防の反れた場所に打ち込ん
で洪水を防いだそうじや。そのおかげで水は
流れ込まなかつたそうじや。宇平はこの年七
十才、物心ついた頃に比べ境川の川底は七尺
（約二、一メートル）も高くなつていたそう
じや。それで水が川へ流れ落ちないので、
田の間を南へと水路を掘り、緒川村から海へ

流れ落ちるようになってしまったそうじゃ。これは近頃
のやり方で、昔は阿野川に流し落としていた
そうじゃ。三河の矢矧（作）川・吉田川・豊
川は知多郡東浦の海へと流れており、阿野川
を加えると大きな四つの川が流れていたそう
じゃ。洪水が潮の流れを押し下げ、師崎辺り
まで塩気が薄くなり、海の中は真水となつて
漁師は漁が出来なかつたそうじゃ。海の魚は
ことごとく沖へと行つてしまい、知多東浦で
漁をすることはできなかつたそうじゃ。当分

の 間 困 る だ ろ う と 噂 さ れ て い た そ う じ ゃ 。

亀 崎 か ら 三 河 へ の 渡 し 船 は 一 里 (約 四 キ ロ)

の 距 離 だ が 近 い も の じ ゃ っ た 。

二 十 四 文 と 定 め ら れ て い た ん じ ゃ 。

家 康 公 が こ こ を 渡 ら れ た 際 、 米 一 升 を 下 さ れ

た か ら じ ゃ 。

ん じ ゃ 。

こ れ は 昔 米 一 升 が 二 十 四 文 だ っ た か

ら と 言 わ れ て い る ん じ ゃ 。

今 度 、 横 根 か ら も 天 白 川 中 根 の 決 壊 箇 所 へ

と 多 く の 人 が 様 々 な 品 や 縄 俵 を 携 え 、 弁 当 を

持　　っ　　て　　一　　日　　作　　業　　に　　出　　掛　　け　　た　　そ　　う　　じ　　や　　。　　二　　十　　八
日　　聞　　い　　た　　と　　こ　　ろ　　で　　は　　、　　御　　側　　よ　　り　　水　　の　　被　　害　　に　　あ
っ　　た　　土　　地　　に　　食　　べ　　物　　が　　下　　さ　　れ　　る　　こ　　と　　に　　な　　り　　、　　御
側　　物　　頭　　松　　平　　甚　　之　　進　　が　　出　　向　　い　　た　　そ　　う　　じ　　や　　。　　御　　小
納　　戸　　向　　の　　下　　役　　も　　従　　い　　、　　村　　を　　巡　　っ　　た　　そ　　う　　じ　　や　　。　　
こ　　れ　　は　　九　　日　　頃　　の　　こ　　と　　だ　　そ　　う　　じ　　や　　。　　そ　　の　　た　　め　　、　　
堤　　防　　の　　決　　壊　　な　　ど　　御　　勘　　定　　所　　へ　　の　　急　　ぎ　　の　　報　　告　　は　　、　　
松　　平　　甚　　之　　進　　か　　ら　　直　　接　　指　　示　　が　　あ　　っ　　た　　の　　か　　、　　ま　　た　　
は　　別　　の　　使　　い　　が　　立　　て　　ら　　れ　　た　　の　　か　　、　　村　　か　　ら　　直　　接　　御
側　　へ　　急　　ぎ　　行　　う　　こ　　と　　と　　し　　た　　そ　　う　　じ　　や　　。　　食　　べ　　物　　を

下された者が話してくれたところでは、食べ
物五日分を下されたそうじゃ。実際は錢を下
されたそうじゃ。
九月一日に聞いたところでは、天白川中根
村の決壊箇所への修復工事の間、御普請奉行次
席服部喜八郎が現場に詰めていたそうじゃ。
工事はうまくいかず、もう一度やり直したそ
うじゃ。味鏡（鉢）の決壊箇所の長さは百八
十間（約三百三十メートル）ほどだそうじゃ。
その辺りは竹腰家の所領であり、尾張藩の御

役人が来ており、ある時など兵部少輔殿から贈られたとのことで、重箱に詰めた肴などが表御役人へ分け与えられたそうじゃ。成願寺村元小屋には御普請奉行筆頭の小池良次郎が詰めていたそうじゃ。それぞれ作業もいったん終了し、御普請奉行は城下に戻り、明日二日には一同役所に出そろうとのことじゃ。御普請奉行の持場では、四十数箇所で堤防が決壊したそうじゃ。役割役は御役米方の仕事と決まっております、本来御普請奉行は出郷するこ

とのない役職ではあるが、今回は人もいない
ので、各地の現場指揮に駆り出されたそうじ
や。瀬古村の作業では、水にぬれたままの床
板の上に畳を敷き詰めていたそうじや。三尺
（約九十センチ）も壁はぬれていたので、そう
夜はそんな家で寝て、昼間は水の中で忙しく
働いていたので、昨日家へ帰っても足がむく
んでいたと話していたそうじや。同じ日の朝、
同姓辰右衛門が寺尾候の家来から聞いたこと
じや。わが家の知行は蟹江が中心で、八月の

洪水のため水が深くたまったままであること
を色々とし出てきたおかげで、役人一人を
差し向けられたそうじゃ。万場宿の南から渡
って新川の堤防を西に越すと水は更に深くな
り、戸田までの道筋はくるぶしも浸かるほど
だったそうじゃ。これは堤防の内側にたまっ
た水だったそうじゃ。福田川の堤防に上がる
と西は海のようで、船で渡ったそうじゃ。二
ツ寺や蟹江で堤防を切り崩してたまった水を
流し出そうとしたところ、蟹江の百姓が竹槍

を 持 っ て 刃 向 っ て き た そ う じ ゃ 。 役 人 一 人 で
は 為 す 術 も な く 、 脇 で 様 子 を 窺 っ て い た そ う
じ ゃ 。 そ う こ う す る う ち に 指 図 が あ り 、 と う
と う 蟹 江 で 堤 防 を 切 り 崩 し た そ う じ ゃ 。 十 三
間 へ 約 二 十 三 メ ー ト ル の は ず が 、 十 五 間 へ
約 二 十 七 メ ー ト ル も 切 り 崩 し た そ う じ ゃ 。
堤 防 は 水 の 勢 い だ け で は な か 崩 れ ず 、 人
の 手 で 堤 防 の 両 岸 を 掘 っ て 中 を 切 り 下 げ て も
だ め だ っ た そ う じ ゃ 。 流 れ 落 ち る 水 が 弱 ま る
の を 待 っ て 掘 り 起 こ す と 葦 の 根 が 絡 み あ い 、

杉の丸太を差し込んで根を起こし、土を流す
とやつと切り崩すことができたそうじゃ。大
抵堤防は中を砂で築くので、少し崩れかかる
と簡単に崩れるものだが、ここは大違いだっ
たそうじゃ。九日夜、佐屋の代官もやつて来
ており、堤防を切り崩させたそうじゃ。寺尾
の役人がまだ作業をしていなければ、無理に
でもお願いして作業を取り計ろうと思つてや
つて来たが、寺尾の役人は作業に取り掛かつ
ていたのので、その辺りに付き随つていたそう

じゃ。御代官吉田助次郎は七月二十一日の風
雨で決壊した八穂新田の堤防を防ぎに二十四
日に出掛けたまま、今日になつてもまだ股引
もはき替えていないと噂されていたそうじゃ。
しかし二日ほどたまつていた水も段々と濁り
がなくななり、須成や蟹江辺りに至つては水が
澄んでいたので、水さえ引けば稲に影響はな
いとのことじゃつた。蟹江川はいつも二尺（
約六十センチ）ほど水が低く、堤防の内側に
たまつた水はうまくだけ排水できたそうじゃ。
さ

て、竹槍を持って刃向かってきた者たちの取
り調べだが、蟹江の何某（ばくち打ち、百姓
ではなし）一人が首謀者で、逃亡したのを捜
索中だそうじゃ。蟹江の庄屋は御勘定所に捕
らえられ、百姓百三十人ほどは町預けとなっ
たそうじゃ。後は首謀者が捕まれば全て明ら
かになるとのことじゃ。
八月十四日、天白川修復工事の割り当てが
大代官方から古渡にあり、百人ほどが出掛け
たんじゃ。よその村からもかなり人がやって

来ていたんじゃない。町へ割り当てられた土砂を運ぶので、精を出して八ツ半（午後三時）まで、に終える村もあれば、夜遅くまで働く村もあつたんじゃない。古渡は夕方には作業を終え、戌半（午後九時）頃には村へ戻っていたそうじゃ。その後も二度三十人ほど割り当てがあり、作業に出掛けたんじゃない。又八月二十一日には味鏡（銃）村の堤防修復工事が割り当てられたんじゃない。この時も天白川の工事と同様に縄や俵を三台の車に積み、百十人で出かけ

た、ん、じ、ゃ、。その頃には堤防の修復工事も終わ
り、柵の間からちよろちよろと少しだけ水が
越すだけだったんじゃ。南に新たに川を掘り、
杭に松葉を結びつけ、水刎を川中に向けて作
ってあったそうじゃ。その日は総勢二千人も
集まっていたいるように見えたそうじゃ。この時
もそれぞれの村に持場を割り当て、作業が進
められたたんじゃ。朝、庄屋が作業者を引き連
れてやって来て大代官方の御役人に人数を届
け、現場では御普請方の指示に従っていったん

じや。仕事を終えるところと大代官方が帳面につけ
たんじや。これは中々良い方法じやった。そ
の後も一度九十六人が出かけたんじや。最初
出掛けた時に清水八王子の前までやって来て
見てみると、方々から集まった空の俵が両側
に山のようになり積み上げられており、それは大
変な量じやった。そこから味鏡（鉢）へ運ば
れたんじや。
古渡村の者が、支払いは一人一匁二分と話
していたがよく分からないうんじや。出役助郷

は一人玄米二升八合（約五リットル）が昔から
の村の決まりじゃ。今度の工事では朝から
晩まで働くので二人分とし、五升六合（約十
リットル）と決められたんじゃ。その頃、米
の値段は一両で三斗八升（約六十八リットル）
ぐらいじゃった。最初は一人六百文と決めて
いたのが、度々工事が割り当てられ費用が掛
かるからと五百文になり、そして四百文とな
ったそうじゃ。白米は百文で六合（約一・一
リットル）が相場だが、実は五合八勺（約一

・ ○五リットルで計算したようじゃ。
九月二日午（午前十一時）過ぎから雨が降
り始め、夜には激しい雨となったんじゃ。明
け方辰巳（南東）の方角からしきりとほら貝
や鼓の音が聞こえたそうじゃ。どうやら中根
村の堤防がまた決壊したようじゃ。この修復
工事のため、古渡村に八日に九十六人ほど、
九日と十日には三十数人ずつが割り当てられ、
合せて七十人ほど出掛け、そうじゃ。
八月十九日、橘町裏和泉屋政蔵が妻の里今

尾へ見回りに出かけ、一日でたどり着いたそ
うじゃ。その道筋は津島から佐屋川を早尾村
へ渡り、赤目を通って給父村から木曾川を秋
江の渡しで越えたそうじゃ。美濃側秋江の南
でおよそ三百間（約五百五十メートル）など
と人は言っていたがいくらか霞み、決壊した
堤防の砂原が果てしなく広がっていたそうじ
ゃ。そこから美濃側へ流れ落ちる水の勢いは
木曾川の流れより強かったそうじゃ。これは
川底が高く、田地が低いからとのことじゃ。

この場所が決壊した時には、給父の堤防の蛇籠（石を積んで堤防を流れから防ぐもの）がめくられたそうじゃ。決壊箇所（の深さは二、三間（約三、六、五、四メートル）あったかもしれないとのことじゃ。西に向かって流れ落ちる波間へ船を漕ぎ入れたそうじゃ。西南にはは砂の寄り集まった小山があり、そこへ大ききな木が頭から刺さっていったそうじゃ。根だけが出ているのは、水が流れ込んだ際に巻き込んだ砂が原因だそうじゃ。まるで湖の中を

漕ぎ進むようだったそうじゃ。ただ村々の藪
や林の一部が水面に出ており、ここは何村の
林、あそこは高須などと話しながらか船人は漕
ぎ進んだそうじゃ。穂先を切り取ったキビの穂口
ったそうじゃ。穂先を切り取ったキビの穂口
が一尺（約三十センチ）ほど浮き出ている水
面を漕ぎ進むと、芋葉の先が浮き出た場所に
出たそうじゃ。段々浅くなると思えたが、誰
もが船を漕ぎ、田畑の上をやっけて来ていたそ
うじゃ。今尾の町外れに船をつけ、そこから

陸に上ると、町中は道路が泥でこねられドロドロになっていていた。そうじゃ。昨日まで土地の低い場所では水が一尺（約三十センチ）もあった。そうじゃ。そこも今朝までには水が引き、庭も下駄で歩けるようになった。そうじゃ。何か悪臭がしており、水に浸かると必ずある。とのことじゃった。家の柱なども、水が引くのにあわせて磨き取らないと泥水の跡が染みついてしまう。そうじゃ。今尾の家臣は水の中を渡り歩き、皆足の皮がむけてしまった。そう

じや。水に毒でもまじっているのかもと話し
ていたそうじや。御領主様の御屋敷にも水が
入ったそうじや。その辺り数里は青く茂った
草などなく、もちろん汁の具にする菜などな
かったたそうじや。見舞いと持って行った五
斗味噌や乾魚で二日過ぎたそうじや。今尾
西の大川の向こう岸堤防沿いに玄宅とい
う金持ちがおり、一町（約百十メートル）四
方もある屋敷を構え、立派な瓦ぶきの大き
な家を建てていたそうじや。川上で堤防が決
壊した

と聞いて、村人たちはこの屋敷なら大丈夫と
集まっていた。そうじゃ。しかし、ここは水の
流れる先となり、さすがにこの大きな家もじ
わりじわりと流され始めたそうじゃ。その時
手すりのついた二階縁側に女三人が現れ、数
時右往左往していったので役人が「あの者たち
を助けよ。」と命じ、船を出させたそうじゃ。
船に三人が乗り移ると家は倒れ落ちたそうじ
や。人に宿る不思議な力で持ちこたえていた
と話していた。そうじゃ。女たちの足にはまめ

が、船の中で氣を失ってしまったそうじ
や。その後手当てをし、粥などすすらせ、一
息つかせたそうじや。玄宅は山中へ逃げ込み、
三日後に戻ると住んでいた場所は池となり、
何も残っていない。なかつたそうじや。貧富があつ
と、いう間に入れ替わつてしまつたんじや。人
の世のなさは、このようなものじや。用
事を済ませ、来た時と同じように船で秋江を
越えたそうじや。その渡し口（給父側か）に
茶屋があつた。そうじや。この老婆が見たと

ころでは、向こう岸の堤防（秋江側）を水が
乗り越え、堤防がズタズタになって水が流れ
込んだそうじゃ。堤防の中ほどを逃げる者が
おり、大きな松に六人が登ったそうじゃ。堤
防の前後が流されたので役人（高須の衆か）
が「あの者たちを助けよ。一人に金一両ずつ
遣わすぞ。」と言うと、村人は「金のためには
行かないが、親切心からなら命に代えても行
ってやろう。」と言ったそうじゃ。役人は「そ
れはもつとも。それならば頼もう。」と言
うと、

四人は櫓（かい）を立て、二人は水をくみ出
しながら大きな松まで漕いで行き、六人を乗
せ、難なく戻ったそうじゃ。すると木は倒れ
流れてしまったそうじゃ。これも人に宿る不
思議な力で木はもちこたえていたと話してい
たそうじゃ。
天白川の東沿い中根村の向かいに熱田の大
宮司様の領地野並村があり、毎年秋には藩の
蔵に米八石を納めていたんじゃ。そのおかげ
で野並の堤防工事は藩が行っていったそう
じゃ。

思うに、文化年間（一八〇四〜一八一八）ま
ではこのようなことは聞いたことがなかった
んじゃないや。当時土普請の役目でこの辺りに数日
いたが、その頃は大宮司自らが工事を行って
いたんじゃないや。その後願いを出すのと指示があり、
決壊箇所の修復工事は御普請方が行い、その
上へのかさ上げは大宮司が行うこととなった
んじゃないや。日頃も願いを出せば認めてもらえる
こともあったんじゃないや。何かと理由をつけ、御
普請奉行限りとしておるんじゃないや。その節は千

秋氏自身が侍一人と草履取一人を連れて見回
りに出かけ、ねんごろに挨拶と札を述べたと
伝え聞く時まで、蔵から米を出すなど聞いた
ことがなかったんじや。古来より御朱印地で
藩からの援助はない土地じや。

立田輪中では又右衛門新田より水が流れ込
み、一面水浸しになったそうじや。この村は
輪中の下の村で、下流から流れて行った水は
上の八ヶ村までは行かなかつたそうじや。も

つとも決壊箇所の修復工事は完了していた。その
うじゃ。高須様の所領美濃高須輪中の秋江と大和田
村の間でおよそ百八十間（約三百二十メートル）
ルに渡って堤防が決壊し、木曾川から水が
流れ込み、輪中一面水浸しになった。そうじゃ。
死者は二人とのことじゃ。ここは未だに修復
工事が終わっていない。そうじゃ。川の本流か
ら水が勢いよく流れ込んでおり、十月に入っ
ても工事は完了していない。そうじゃ。来年の

麦の種もまけず、貧しい者は困っているそう
じゃ。高須様の役人が困るのももともとなこ
とじゃ。
多芸輪中は大牧新田から水が流れ込んだが、
死者はなかったそうじゃ。この村は鵜多須陣
屋の所領で、決壊箇所での修復工事も手厚く行
われたそうじゃ。
海松輪中柿内村では、水を流し出すため堤
防を切り崩したそうじゃ。決壊箇所は大垣領
福束村で死者が三人出たそうじゃ。

この他にも北方代官支配所や他領で水が流
れ込んだ村の数は数え切れないうじゃない
れについて、は昼夜を問わず村を巡回中だ
じゃ。工事は公儀御組込となり、役人がや
て来ており、何かと忙しいそうじゃ。

佐屋の下にある八穂新田（初めはつほ、今
やつほ）は、高潮で堤防が崩れ、家も流され
てしまったんじゃない。ここを今度美濃の高須輪
中と共に公儀御普請（幕府の行う工事）とす

る こと にな った ん じ ゃ 。 尾 張 様 か ら 幕 府 役 人
の 筆 頭 へ は 銀 二 十 枚 、 以 下 そ れ ぞ れ に 下 さ れ
た 品 が あ っ た そ う じ ゃ 。 何 れ も 市 谷 へ 尾 張 藩
上 屋 敷 へ か ら 御 老 中 へ は 話 を し て あ る と の こ
と じ ゃ 。 御 普 請 御 組 込 と は 、 御 料 所 ・ 御 旗 本
領 な ど の 入 会 地 一 円 を 公 儀 御 普 請 と す る 際 に 、
近 辺 の 尾 張 藩 御 領 な ど も 組 込 入 る 願 い 出
て 受 理 さ れ た 分 や 大 名 領 や 近 辺 も 組 込 入 る 願
う 願 い 出 て 受 理 さ れ た 分 は 、 全 て 公 儀 御 組 込
御 普 請 と 言 い 、 そ の 近 隣 や 同 郡 内 は 組 込 入 る

が認められるものだそうだが、今回の八穂新
田は、秋江から数里離れた海辺の土地なんじ
や。
十月二十七日朝に聞いたところでは、上有
知陣屋へも困窮した者たち七百人ばかりが押
しかけ、食べ物を探求めたそうじゃ。どうやら
最近のことのようで、ヒエを与えたそうじゃ。
西美濃木曾川堤防の秋江・大和田の決壊箇
所は高須様の御領分で、高須様が修復工事を

行　　う　　は　　ず　　だ　　っ　　た　　ん　　じ　　や　　。　　か　　ね　　て　　か　　ら　　鵜　　多　　須　　の
陣　　屋　　に　　話　　を　　し　　て　　あ　　っ　　た　　が　　、　　九　　月　　・　　十　　月　　に　　な　　っ
て　　も　　工　　事　　は　　完　　了　　せ　　ず　　、　　後　　々　　公　　儀　　御　　普　　請　　の　　組　　み
込　　み　　願　　い　　を　　行　　っ　　た　　ん　　じ　　や　　。　　十　　月　　に　　幕　　府　　役　　人　　が
や　　っ　　て　　来　　て　　工　　事　　に　　取　　り　　掛　　か　　っ　　た　　が　　、　　地　　元　　の　　者
を　　使　　っ　　て　　の　　作　　業　　は　　失　　敗　　し　　、　　工　　事　　を　　完　　了　　す　　る　　こ
と　　が　　で　　き　　な　　か　　っ　　た　　そ　　う　　じ　　や　　。　　そ　　こ　　で　　東　　海　　道　　天
竜　　川　　の　　者　　を　　呼　　び　　寄　　せ　　て　　作　　業　　を　　行　　い　　、　　十　　一　　月　　中
旬　　ま　　で　　に　　工　　事　　を　　完　　了　　す　　る　　こ　　と　　が　　で　　き　　た　　そ　　う　　じ
や　　。　　天　　竜　　川　　は　　度　　々　　洪　　水　　が　　起　　こ　　る　　の　　で　　工　　事　　に　　は

長けていたそうじゃ。さすが天下の御威勢と
話していたそうじゃ。この秋江の決壊箇所は、
田地が低く川底が高いので水が川から田地へ
向かって滝のよう流れ落ちていたそうじゃ。
これでは工事は難しいだろうと話していたそ
うじゃ。
西美濃不破郡に十六という村があつたんじ
や。ここ数ヶ月公務で江戸へ出府しており、
そこで嘆訴したそうじゃ。この村の土地は昔
川底より高く、上流の五十余村からの水が川

からあふれると、その水が下から村中の田に
流れ込んでいた。そうじゃ。五十余村は水害か
ら逃れてきたことを旧例とし、十六村の川端
には昔から堤防がなかった。そうじゃ。しかし、
近年次第に川底が高くなっており、少し水が
あふれただけで下から水が流れ込むようにな
り、毎年のように田は全滅してしまっただけ
じゃ。それでも百六十軒ばかりの村人は、村
の端々の高台で一年命をつなげるだけの穀物
を得ていた。そうじゃ。これは内緒のことなん

じや。しかし、この年は更に水かさが増し、
高台でも穀物が育たず命をつなぐことが難し
かった。そうじゃ。それで五十余村を相手に訴
え出した。そうじゃ。この村近頃では洪水後の干
上がった土地を掘り返し、来年の麦作りの耕
作を行っていた。たんじゃ。二、三人の百姓が畔
に倒れていた。ので、「どうした。」と近寄って
尋ねると、「腹が減って働けない。休ませて
くれ。」と話している。うちにも、顔色が悪く
なり意識も薄らいでいくようなので、村の有力者

と相談し急いでヒエの粥などを食べさせたそうじゃ。うじや。すると息を吹き返したそうじゃ。村にはこのような村人がおよそ六十人ばかりいる。このことじゃ。鵜多須の御代官より幾日限り状を上へと話してもらい、御側より五日分かの援助がなされたが、それもわずか五日分や七日分で、来年亥（一八五〇）の麦の実る初夏までは数ヶ月もあり、どうやって命をつながせればよいかと支配方の役人も心を悩ませていたそうじゃ。

名古屋七曲りのある屋敷の門前で餓死した
者一人がいたそうじゃ。宮の伝馬町御朱印御
番所前にも死者一人がいたそうじゃ。一説に
は財産を失った貧しい者で、この寒空に堪え
られなかったとのことじゃ。
御勝手方御勘定吟味役山本鉄九郎が関東へ
の旅立ちのあいさつに城へ参上し、御本丸拍
子木場番所へやって来ていたんじゃ。山本が
関東へ向かう理由は、一説では尾張の米価が
高騰しているからとのことじゃ。盆以降徐々

に値上がりし、八月以降は六合売りと言いな
がら一貫文で五升七合しかなかったんじゃ。
米屋には六升と書いてあるが、持ち帰り調べ
てみると六升ないのはかねてからの噂通りじ
や。いたる所で身寄りもなく飢え苦しむ人が
いたので、仙台米を買い付け、尾張に運ぶの
が仕事とのことじゃ。十月の末頃、御老中松
平和泉守殿が京都所司交代の引き渡し、用務
のため上京した際、宮の宿に宿泊したんじや。
和泉守殿家臣からの江戸の噂では、仙台米を

積み込み運び出したところのことじゃ。やがて安
い米が食べられるようになるだろうと宿主に
話していた。そうじゃ。十一月十七日に江戸を
出た便りでは、雑司ヶ谷辺りで麦三千俵を買
い上げ、尾張へ送られるとか、仙台米を買い上
げ、尾張へ送られるとかいう話が聞こえて来た
とあった。そうじゃ。そのため名古屋の米相場
もひと頃より落ち着き、米俵を競って買いあ
さることもひと頃より静まったんじゃない。
尾張藩が新米での酒造りをやめた。そうじゃ。

十一月二十六日から古酒の値段が上がり、一
升二百九十二文で売り始めたそうじゃ。ただ
し、国内五社に供える酒は造るよう命じられ
たそうじゃ。あるいは、それぞれ五十石ずつ
とのことじゃ。
当時の尾張藩御老衆御加判横井伊折介殿の
所領は海西郡赤目の辺りにあり、立田輪中の
南又右衛門新田より水が流れ込み、北へと向
かって弱に流れて行ったそうじゃ。しかし、
人の住む一画には流れ込まなかつたそうじゃ。

田は水害で稲が育たず、四千石のうち三千四
百石分が駄目になり、六百石分だけが大丈夫
だったそうじゃ。十一月二十七日に聞いた話
じゃ。
この秋大風雨が三度あり、田の稲穂は倒れ、
もみは泥の上に芽を出し、穂から稲葉が生え
ていたんじゃない。刈り入れる時には長いもので
一尺（約三十センチ）ほどにもなつたが、い
つもの稲ではないのか実がつかなくなつたんじ
や。四、五寸（約十二、十五センチ）のもの

には少し実がついたが、それをつくると砕け米
になつてしまつたんじゃないや。このため御代官よ
り下役御蔵役所には、年貢米や欠米へかんま
い・輸送中などに欠ける米の不足を補う予備
の米の俵に砕け米が交じつていないものは
なく、砕け米を除くと納める米はなくなる
話がしてあつたんじゃないや。このよう
な芽を出した穂は刈り入れる時に散り落ち、
上に米を敷いたようになつたんじゃないや。
踏んでしまふと取り上げること
できなかつ

たんじゃ。この年早春から市中や様々な場所
で、歌の最後にもったいたないものと
歌っていたが、そこに潜む兆しや天からのお
告げに気付かなかったとは愚かだったと話し
ていたんじゃ。
十月中、監察使としてひそかに鵜多須陣屋
の支配地を巡り歩き、民家を視察したそうじ
ゃ。宿でも食事は特別のものを用意させず、
民家の食事を取り寄せて食べたそうじゃ。大
根葉・いも五分・麦四分・米一分を炊いたも

ので、それが庄屋などの日頃の食事だった。その
うじゃ。中々食べにくいと話していた。そうじ
や。甥の岸岩太郎がしてくれた話じゃ。
このように御側御用人・御勘定奉行の者が
村々を巡り視察したんじゃ。宿となるのは領
民にとつては負担であり、特に食事の用意が
心配と話していたんじゃ。しかし、役人も面
倒とは承知しており、供の者も少なくしてい
たんじゃ。天明（一七八一〜一七八九）の昔、
御国奉行を勤めた人見氏が村を巡った際は、

粗末な籠で巡ったとのだが、今回はどう
したんじやろう。
十二月十一日、土器野新田の徳蔵がやって
来て話してくれたところでは、村で水が流れ
込んだ場所の百姓は、その時ちようど旅に出
ていて助かったそうじゃ。その後村内七ヶ所
の決壊箇所の修復工事は、残らず御救へ窮民
に工事の仕事を与え、給金を与えるゝで村が
請け負うよう仰せ付けられたそうじゃ。
し、修復工事は中々進まず、自力だけでは無

理とよその村からも人を入れて行っていたが、
最近行き詰まり、今日御蔵より粃百五十俵が
御救に渡されたそうじゃ。これは清須代官の
支配所へ渡ったそうじゃ。
同じ日、平岩覚右衛門倅で御水主の鎗太郎
が八穂新田から戻って来たんじゃ。この新田
は尾張領が六割、伊勢領が四割の入会地だそ
うじゃ。周りが三里（約十二キロ）もある土
地だが、海側の堤防が長さ四千間（約七、三
キロ）ほど高潮で押し流されたそうじゃ。外

側はえぐれ、堤防と共に新田内へ押し流され
たが、堤防のあった場所には松の木が一本ず
つ残った高い土地があつた。そうじゃ。人も家
も押し流され、残つた堤防の上に粗末な小屋
を建て、そこに住む姿は哀れだつた。そうじゃ。
先ごろ、公儀御普請に組み込まれた。そうじ
や。その検査に幕府の御勘定留役・御普請役
などがつて来た。そうじゃ。松名新田始め尾
張伊勢の入会地以外の村々からも組み込みの
願いに笠松へ出ると、話がうまくまとまり、

現場の調べも済んだとのことじゃ。この頃まで
に修復工事を終えた新田では、地面に一尺
（約三十センチ）ほど朽ち果てた稲株が倒れ
ており、哀れな様子だったそうじゃ。
十二月に入って聞こえて来たことじゃ。古
渡西の出町に新長屋と言う所があったんじや。
ここに住む夫婦は生活が苦しくなり、大坂へ
立ち去ったそうじゃ。二人は別々の商家へ奉
公に上がり、一日三度白米五合に水を加えた
せんじ汁を飲まされ、十一、二人で暮らして

いたそうじゃ。十日ほどで我慢できなくなり、
故郷の元住んでいた借家に戻って来たそうじ
や。まだこちらの方が暮らしやすいのでこれ
からどんなことをしても金を稼ぐと話して
いたそうじゃ。清水町辺りに住む者は一日百
銭の儲けがあった。そうじゃ。それでも家賃を
払いながら夫婦と子ども一人が暮らしことは
できなかつた。そうじゃ。死んだ方がましと子
どもを絞め殺し、首をつつたそうじゃ。十六
日の夜に糸が話してくれたことじゃ。そろそ

ろ夜逃げをすると、言つて、昨晚橘町駿河屋の
一軒が立ち去つた。そうじゃ。二十日の夜、理
助が話してくれたことじゃ。
矢合村浅右衛門が十五日にやつて来たんじ
や。我々は清須代官の支配で、近隣の村々は
毎年およそ三割五、六分の年貢率だが、今年
は一割七分ほど下が、り一割八、九分となつて
安堵していた。そうじゃ。しかし、小作は決
められた税を出せないとのことじゃつた。
村々や町々の御当金（調達金）は厳しいそ

うじゃ。名古屋三人衆（関戸・内海屋・伊東
（藤）は四万両、内海の小平治は一万五千両
とのことじゃ。小平治がそんな大金の持ち合
わせはなく、親船（大型船）でも売らなけれ
ば払えないと申し上げる。と、それならそうし
ろと言われる始末で、どうやら今回は容赦し
てもらえない。まあこれはもつとも
なこと、裕福な者が全員冥加金を払えばよ
いことなんじゃ。これは山勘が二十一日に話
してくれたことじゃ。小平治の海や田からの

儲けは年に一万五千両あるそうじゃ。それを
そのまま差し出すことじゃ。これは理助が話
してくれたことじゃ。古渡辺りまでも御当金
が課せられるそうじゃ。内緒だが、どうやら
表向き金持ち株に課しているんじゃない。
熱田始め新田の持ち主へは、来年秋の年貢
を先納し、差継（差引勘定）で一万両調達す
るそうじゃ。近頃は返済確実な証文でも信用
できなくなり、確実な場合でも自分の手元で
処理できるものでないかと承知しなかつたそう

じゃ。それで年貢を先に押えておくそうじゃ。
自分が立て替える分を差し押さえ、肩代わり
するそうじゃ。

庚戌（一八五〇）十二月二十六日頃のこと
じゃ。門前の小さな借家に住む子どもたちが
朝から泣いていたそうじゃ。声を聞き付け近
所の者に尋ねてみると、亭主は先日行方をく
らまし、女房は昨日の夜からいなくなつたと
のことじゃつた。子どもを残し逃げ去つたよ

うで、十一、二歳の子を頭に五人全員が泣いていたそうじゃ。かわいそうなことに朝から何も食べておらず、それではこの寒さに耐えられないと有り合せの飯びつを持って来させ、粥にして与えたそうじゃ。その後近く縁者を呼び寄せ、その夜の寝場所が確保できるよう手当を与えて家族を納得させ、一人ずつ親類に預ける手配をさせたそうじゃ。これは前津長道の東突き当たり南へ二軒目に住む安藤清之丞が話してくれたことじゃ。年老いた母

親を置き去りにした息子もいたそうじゃ。誰
もがその日暮らしの生活を送り、二百文稼い
でも生活するには三百文必要なのでこうなっ
てしまっうんじゃ。十二月の初め、志水町辺り
の者は儲けが二百文あるが、元手が百文かか
っているのので、手元には百文だけが残ったそ
うじゃ。百文を食べ物・小遣い・家賃に当て
ると半分も残らなかったそうじゃ。そのため
夫婦は人生を悲観し、子どもを絞め殺して二
人で首をつつたそうじゃ。これは大晦日にシ

マが話してくれたことじゃ。古渡の闇の森辺
りに、長く病を患う老女が捨て置かれてあつ
たそうじゃ。今も息があるとのことで地面に
倒れているそうじゃ。ふさが見てきたそうじ
や。
ここからは翌年嘉永四辛亥（一八五一）の
話じゃ。正月二日、広小路呉服町の先辺りに
白髪の頭が出た菰（まこも・イネ科の植物で
作ったむしろ）に包まれた死体が捨て置かれ
ていたそうじゃ。

ある人が江川端を通っているとき、小さい子
を懷に抱いた三十過ぎの女が話し掛けてきた
そうじゃ。ここからそれほど遠くない場所に
住んでいたが、夫が長女を連れて出て行き、
置き去りにされてしまったそうじゃ。それで
夫の在所大垣を訪ねてみたが、夫はおらず相
手もしてくれなかったそうじゃ。仕方なく住
んでいた家に戻ったが、家財道具はほとんど
売り払い何も残っていなかつたんじゃ。それ
で在所小牧に行こうとしたが、一晩かけて大

垣から戻ったので銭はなく、腹が減って歩け
ない。と嘆いていた。そうじゃ。在所に行くしか
手はないが、行っても在所に置いてもらえない
とも限らず、どうすればいいのかと嘆いてい
たそうじゃ。あまりのことに持ち合わせた銭
を少し与え、その場を立ち去ったそうじゃ。
正六と竹梅が話してくれたことじゃ。
西北城下のはずれ一、二里（四、八キロ）
ほどの被災地から、生活に困った男女がお椀
などの器や重箱のような物を携え、城下へ物

売りに来ていたんじゃ。三人、五人と連れ立
ってやって来ており、十二月の初めには三の
丸の大きな家で食べ物やねだる姿をよく見掛
けたんじゃ。

この年秋の洪水高潮による領内決壊箇所を
御組込御普請とすることについて、阿部伊勢
守へ願い出ていたところ、願い出た内の九十
八ヶ村は御組込御普請を仰せ付けられたそう
じゃ。美濃飯田村・蛇持村・尾張寛延新田・

芝井新田・鎌島新田・森津新田・松名新田に
ついては御普請を仰せ付けられない旨、一昨
日書面で伝えてきたそうじゃ。御礼の品を持
って伺い、少しお話しても考えたが、文化
（一八〇四）一八八〇の御組込御普請の際
は全ての工事が完了してから御礼を申し上げ
ているので、今回も御礼など必要ないと友阿
弥が口頭で言ってきたのを承知し、山城守へ
伺いを立てるべく出向くと、今まで通り取り
計らうよう申されたと友阿弥が申し立ていたそ

う
じ
や
。
海
西
郡
八
穂
新
田
も
御
普
請
御
組
込
と
な
っ
た
そ
う
じ
や
。
現
場
へ
は
先
だ
っ
て
御
勘
定
・
御
普
請
役
等
が
や
っ
て
来
て
お
り
、
工
事
が
完
了
す
る
前
に
は
江
戸
よ
り
御
勘
定
吟
味
役
の
一
人
都
筑
金
三
郎
が
木
曾
路
を
通
り
到
着
し
た
そ
う
じ
や
。
木
曾
川
の
川
筋
を
参
拝
し
、
再
び
川
下
か
ら
川
々
を
調
べ
た
後
、
伊
勢
神
宮
や
。
そ
の
際
、
工
事
の
遅
れ
は
三
度
ま
で
延
期
の
願

いを聞き入れてくれるとのことじゃった。工
事はどこまで完了したかで経費が支払われ、
八分しか出来上がっていなければ、総経費の
八分しか支払われなかつたそうじゃ。残り
領主の負担となるので、一生懸命に働いてい
るこのことじゃ。尾張国御役人御勘定吟味役
・所附御代官等が挨拶に出向いたそうじゃ。
中々頭を上げることもできず、茶釜をなでモ
ジモジしていたそうじゃ。所附御代官では佐
屋・北方・太田・上有知などだそうじゃ。一

ヶ所およそ一万両でも四万両の経費じゃ。三月六日で公役衆は城下へ帰ったそうじゃ。どうやら工事が完了したようじゃ。検査が済むとすぐ引き揚げたそうじゃ。一日たりとも猶予することはなかつたそうじゃ。江戸から七万両ほどが届き、残りは笠松郡代の支配地に調達を申し付けて支払ったそうじゃ。尾張・伊勢・美濃三国でざっと十萬両ほどと見受けられたんじゃ。笠松の郡代は関与せず、今回は江戸衆がやって来ての幕府直轄の工事・検

査だったの、全く御手普請（幕府直営の工
事）だと話していたとのことじゃった。これ
は嘉永四亥（一八五一）三月二十四日夜に聞
いた話じゃ。

美濃秋江では、堤防の修復工事以来、堤防
の下から川水が田の方へ染み出ていたそうじ
や。ここでは、様々な物を用いて水を止めた
ためのようじゃ。もつとも、難所の工事なの
で、このようないきなりこともあつたんじやろ
う。こ

れまでに、馬踏（平らな部分）四間（約七、
二メートル）が、尾張の御囲堤より立派に出
来上がっていったそうじゃ。川側と内側に二間
（約三、六メートル）幅の小さな段を築き、
川側は基礎には根柢を入れ、堤防の腰には籠
を伏せていたそうじゃ。段々と出来上がって
きているようじゃ。辛亥（一八五四）六月初
めの話じゃ。

その辺りの庄屋がやって来て、幕府の御普

請役に「今日の御見聞では、どのよう
に猿尾など仰せ付けられるのですか。」
と尋ねたところ、
「お前は、我々幕府の御役人に対し
そんな事を尋ねてどうするつもりか。」
と言わたので、尋ねただけでござい
ます。」と庄屋が答えると、
「庄屋の分際で、幕府の御役人に尋
ねるなど、
もつての外。」と御普請役は言うや
いなやその
辺りにあった杉の棒で庄屋を激しく
打ちつけ
たんじゃないや。庄屋は氣絶寸前で、
半死半生だっ

た ん じ ゃ 。 「 ど う か 手 を 緩 め て 下 さ い 。 こ れ
以 上 打 つ と 死 ん で し ま い ま す 。 」 と 脇 村 の 庄 屋
が 中 に 入 っ て 言 う と 、 「 死 ん だ ら こ の 川 に 流
し て や ろ う 。 幕 府 の 御 役 人 に 無 礼 を 働 く 者 に
構 う こ と な ど な い 。 」 と 幕 府 の 御 普 請 役 は 言 い
な が ら 再 び 打 ち つ け よ う と し た た ん じ ゃ 。 脇 村
の 庄 屋 が 間 に 入 る と 手 を 緩 め た た ん じ ゃ 。 も う
一 回 打 ち つ け る と 死 ぬ と こ ろ だ っ た た ん じ ゃ 。
そ れ で も 幕 府 の 普 請 役 は 「 幕 府 の 御 役 人 に 対
し て 無 礼 を 働 く 者 な ど 知 っ た こ と で は な い 。 」

と再度打ちつけたので、脇村の庄屋が必死で
詫びを入れ、事を収めたんじゃないや。幕府の御威
光を振りかざすとはこんなものなのじゃ。
　　ついでに言っておくと、昨年江戸印旛沼の
辺りに仕事で来ていた御普請役手代二人は、
行く先々で不穏な空気があり、百姓たちが棒
で御役人を打ちつけようとするので、ほうほ
うの体で逃げ帰ったそうじゃ。取り調べとな
り、その時に刀を抜いたか抜かなかったかを

尋ねられたそうじゃ。穩便に済ませるようと
拔かなかったと答えるのと、暇を下されたこと
があつたそうじゃ。
嘉永の年に尾張蟹江の辺りで、乙濤・違い
切裁許の手代に百姓たちが竹槍で刃向つてき
て、手代は為す術もなく、裁許もできずに村
任せにしておくというところがあつたんじゃ。
その後蟹江村の村人三十人ほどが籠に入れら
れ、首謀者は逃亡したんじゃ。手代は無事だ
つたんじゃ。

今度やつて来た江戸衆は御勘定所の地理・算術に優れた者で、すぐ検査や指示書の作成を申し付け、命令書を渡したんじゃない。昼夜を問わず一生懸命働くことを心掛けていたんじゃない。ある時、御勘定所の者がやつて来て、その場にいた御普請役にこここの三角の欠所（不作地・荒地）はどのよう計算したのか尋ねたんじゃ。御普請役は懷を探ったが、持つてくるはずの帳面を宿に忘れたようでなかつ

た　ん　じ　ゃ　。　そ　れ　で　大　体　半　分　と　い　う　こ　と　で　計　算
し　た　と　答　え　た　ん　じ　ゃ　。　す　る　と　「　そ　ん　な　こ　と　で
は　仕　事　が　出　来　な　い　。　暇　を　取　っ　て　江　戸　へ　帰　れ　。」
と　御　勘　定　所　の　者　に　叱　ら　れ　た　ん　じ　ゃ　。　し　か　し　、
そ　の　事　を　根　に　持　た　ず　、　そ　の　夜　は　同　じ　宿　に　泊　ま
り　、　い　つ　も　と　変　わ　ら　ぬ　様　子　だ　っ　た　と　の　こ　と　じ
ゃ　。　帳　面　を　忘　れ　た　不　注　意　を　と　が　め　た　こ　と　で　は
あ　る　が　、　こ　れ　で　幕　府　の　御　役　人　は　、　小　さ　な　失　敗
も　深　く　戒　め　て　い　る　の　じ　ゃ　。　様　々　な　事　の　心　掛　け
が　、　こ　こ　か　ら　察　す　る　こ　と　が　で　き　る　ん　じ　ゃ　。

今度、ある村が夜も工事を行いたいと願
い出で許され、幕府の御役人が昼夜現場に詰
めることになったんじや。しかし村役人は疲
れて困ってしまい、御詫びを入れて昼だけ
してもらったそうじや。幕府の御役人の勤
ぶりの厳しさがこの話からも分かるんじ
や。河原欠新田では人家が流されてしま
ったんじや。住んでいた者は立ち去り、
村は捨て置かれて工事のための調査も
してもらえなかつ

た ん じ ゃ 。 福 原 新 田 は 堤 防 が 跡 形 も 無 く な り 、
土 地 は 捨 て 置 か れ 、 福 原 太 兵 衛 と か 太 左 と か
言 う 落 ち ぶ れ た 夫 婦 だ け が 粗 末 な 家 に 住 ん で
い た ん じ ゃ 。 こ の 家 以 外 に 民 家 は な か っ た ん
じ ゃ 。 例 の 幕 府 の 御 役 人 の 宿 へ 毎 日 出 掛 け 、
夜 は 話 し 相 手 を 務 め 、 足 や 腰 な ど を 揉 む な ど
し な が ら 親 切 に 仕 え て い た ん じ ゃ 。 菓 子 な ど
を 二 つ 、 三 つ 携 え 、 毎 日 の よ う に 嘆 願 し て い
る と 、 つ い に 工 事 の 調 査 が 行 わ れ た ん じ ゃ 。
そ し て 福 原 の 堤 防 は 元 通 り に 築 か れ た ん じ ゃ 。

防　　り　　し　　ろ　　落　　す　　ま　　ん　　そ　　し
を　　、　　た　　う　　ち　　る　　う　　れ　　か　　し
切　　も　　ん　　か　　ぶ　　役　　の　　や　　よ　　し
り　　う　　じ　　ら　　れ　　所　　で　　。　　り　　、
崩　　無　　や　　、　　た　　に　　、　　そ　　高　　元
し　　理　　。　　今　　身　　願　　こ　　れ　　い　　の　　堤
、　　だ　　大　　後　　で　　い　　の　　で　　堤　　防
水　　と　　水　　の　　は　　出　　上　　は　　防　　の
を　　判　　で　　た　　願　　る　　は　　ま　　を　　高
流　　断　　堤　　め　　い　　の　　堤　　築　　さ
し　　し　　防　　に　　出　　防　　洪　　こ　　は
込　　た　　を　　秘　　る　　を　　水　　と　　記
む　　ら　　水　　策　　こ　　高　　の　　は　　録
ん　　、　　が　　を　　と　　く　　被　　で　　が
じ　　川　　越　　授　　も　　す　　害　　き　　残
や　　下　　し　　け　　で　　る　　に　　な　　っ
。　　で　　そ　　る　　き　　の　　う　　か　　て
堤　　少　　う　　こ　　な　　よ　　っ　　お
防　　し　　に　　と　　い　　う　　つ　　り
の　　堤　　な　　に　　だ　　に　　係　　し　　た　　、

内に一杯水が入れば、堤防が流されることは
ないんじゃない。わしらが言ったと絶対漏らすな
と話していたそうじゃ。と、言うことは、幕府
に前々から堤防の高さの記録が残り、その上
一人でも人が住んではいられ、福原のよう
に復工事が行われ、人が住まなければ捨て置
れ、工事も行われ、人が住まなければ捨て置
いう区別は世間一般にもあることなんじゃ。

辛亥（一八五一）八月二十六日明け方まで

激しい雨だったんじゃないや。昨年
の秋の大雨みた
いだと話していたんじゃないや。
害はなかったんじゃないや。木曾
川・庄内・新川・
天白川と大きな川はほとんどな
かったんじゃないや。
但し、大山川などの用水へは少
し水が流れ込
み、山崎川も川上で一ヶ所堤防
が決壊し水が
流れ込んだ
流れたんだ
小सानなもの
でたいし
たことも
なく、
水の被害
もなかった
んじゃないや。
鳴海・山王・山
下から天白川の橋のたもとまで、
山崎橋の西

泊 木 た や 船 と じ 大 旅 か
し 曾 そ つ を 喜 や 膳 人 ら
た 川 そ う と 出 ぶ ° そ 大 は 八
そ も じ 次 の す も こ 夫 道 丁
う 七 や の が の へ 夫 を 縄
じ ° 日 難 い 先 国 行 手
ゃ ° に出 した そ の 途 く ま
。 発 し う 大 中 も で
翌 し ° 更 に 水 中 困 は
朝 昼 じ や ° 宮 っ 水
六 には 万 船 の て 股
合 ほ 佐 一 賃 宿 い ぐ
ど お 屋 泊 場 が で た ら
の っ には した 一 泊 ん い
水 々 には した 泊 じ ま
と こ 予 定 泊 した じゃ °
な こ 定 が 泊 した そ 毛
っ で が 泊 した う 利
た 一 ° じゃ °
。

ので、船を出し下ったそうじゃ。御船手御馳走方の噂じゃ。ただし、去年の秋よりは水も少なく、決壊箇所も少なかったんじゃ。御殿様が御在国で、その御威光とも言われていたんじゃ。

続いて安政二年（一八五五）のお話じゃ。

七月二十五日から雨の気配が強まり、降つたり止んだりを繰り返していったんじゃ。二十

八日には雨あしが強まり、二十九日なつても
降り続き、昼にはバケツを引つ繰り返したよ
うな大雨になつたんじゃないや。去年の冬の地震で
我が家の古い瓦には狂いができたのか雨漏り
がしていたんじゃないや。台所に雨漏りを受けよう
と器を並べたが、滝のようで一体どこから漏
れているのか分からないような有様じゃつた。
仕方がないので、一番たくさん漏れてい
る場所に戸板をひさしのようにな
を置き、流れる水を受けていたんじゃないや。
。しか

し、既に畳は濡れてしまい、後の祭りじゃつ
た。川の水があふれそうになる頃、息子友次
郎は城を出て御太鼓櫓下の御堀端通りを用が
あったので東へ向かうと、下駄が沈むほどの
水だった。そうじゃ。雨水はよどみ、御太鼓櫓
筋ではくるぶしほどまで水があり、両側の屋
敷は、門前蹴放しへ門の内外を仕切る敷居へ
まで水がついていた。そうじゃ。大名小路へと
回り、本町通りを南へ下ろうとすると、伝馬
町の下辺りでは家の中まで水が入っていた。そ

うじゃ。通りも水に浸かっていて、
そこを避けて七間町を下り、広小路北まで来
ると、その先は一面川のようだったそうじゃ。
呉服町西角にある剣術の師太田忠四郎の所に
立ち寄る頃には、水は膝の下までになつてい
たそうじゃ。そこから万松寺前まで向かうと、
白林寺門の北堀端の道は水に浸かり、万松寺
・総見寺の堀も水があふれそうになつていた
そうじゃ。水の深さは膝の下ほどまであり、
裸足で家まで帰ったそうじゃ。急いで枇杷島

の 水 の 様 子 を 見 て こ い と の こ と で 、 八 ツ 半 (午 後 三 時) 頃 に 家 を 出 た そ う じ ゃ 。 枇 杷 島 橋 東 の た も と へ 到 着 し た の は 七 ツ (午 後 四 時) 過 ぎ だ っ た そ う じ ゃ 。 橋 の た も と 、 橋 か ら 二 間 (約 三 ・ 六 メ ー ト ル) ほ ど 東 の 通 り に 長 さ 二 間 幅 三 尺 (約 九 十 セ ン チ) の 穴 が 開 き 、 そ こ か ら 水 が 噴 き 出 す の を 土 俵 で 埋 め て い た そ う じ ゃ 。 堤 防 の 水 番 所 に は 御 普 請 奉 行 の 服 部 喜 八 郎 と 石 川 弥 兵 衛 が 詰 め て お り 、 水 位 を 測 る 杭 (石 柱) は 八 合 三 勺 を 示 し て い た そ う じ

や。大橋を渡って中嶋を行く頃には膝の下ま
での水となり、水の勢いは相当なものだった
そうじゃ。西小橋では橋の下へヒタヒタと水が
り、中ほどでは橋桁の下へヒタヒタと水がつ
いているように思えたそうじゃ。西へ渡ると、
橋の南北の堤防を水がシトシトと越えていた
そうじゃ。そこから箆笥などを家の中から運
び出す西枇杷島問屋町の様子が見えたそうじ
や。水の勢いが恐ろしくなつて小橋を引き返
していると、御勘定奉行の小池良次郎も小橋

を渡って行ったが、どうやら恐ろしいのは同
じように馬に乗ったまま引き返してきたそう
じや。中嶋を過ぎる頃には水も膝の上までに
なり、大橋を過ぎて杭を見ると八合八勺だっ
たそうじゃ。少しの間で五勺も増水したよう
じゃ。堀越村では堤防を越える水の勢いが激
しく、堤防が決壊する恐れもあったそうじゃ。
決壊すると枇杷島は水に浸かり、栄村・押切
の通りは通れなくなる。恐れもあったので、慌
てて押切まで走ったそうじゃ。江川橋の西に

たどり着く頃には決壊の恐れもなくなくなってお
り一安心したそうじゃ。連れと寅薬師横町を
北へと向かい、御台所町に訪ねたい家があつ
たが、江川はあふれそうになり、薬師裏の東
西では水の深さが膝までもあり、渡ろうにも
この先どれほどの深さか分からないので引き
返すことにしたそうじゃ。大幸川朝日橋の落
口へ水の流れ落ちる場所では杭の頭も見え
ず、東西堀留辺りでは石垣の上まで水がつく
ほどだった。そうじゃ。ちようど夕暮れの満潮

と重なり、川の水が増えていたそうじゃ。その
の前に勝川味鏡（錠）の堤防は北へと決壊し、
水が流れ込んでいたそうじゃ。新川の堤防が
所々で決壊したので、すぐに枇杷島川の水位
は下がったそうじゃ。夜五ツ（午後八時）友
次が帰ってきて話してくれたことじゃ。去年
の冬は大地震、この年は秋の洪水、一体どう
なっ
て
し
ま
っ
た
ん
じ
ゃ
。

八月八日、光音寺村の半七が話してくれた

ことじゃ。二十九日、堤防の村側土手からか
なりの水が染み出していたので流れを良くす
るために川側に茂った松を切り、村側には杭
を打ったそうじゃ。そして裂け目には畳や土
俵を詰めて染み出る水を防いだそうじゃ。川
底より田は一丈（約三メートル）も低かった
ので、土手から水が染み出したこのことじゃ。
昨年の地震で裂け目ができていたのかもと話
す者もいたそうじゃ。そうこうするうちに福
徳・中切・成願寺の福德三郷へ水が流れ込み、

川の水位が下がったそうじゃ。半七が常日頃
人を出していた小僧庵（萩野村にあつた庵）
の堤防ではたまつた水があふれそうになり、
矢田川へ水を流し出そうと南へ堤防を切り崩
したそうじゃ。少しすると矢田川の水位が上
がり、逆に水が流れ込んだそうじゃ。その水
は三郷を西へと流れ、福德村にある聖徳寺の
林から南の矢田川へと抜けたそうじゃ。その
時、周りの低い土地に住む人々が、堤防の上
にある小さな段を築いた二軒の新しい家へた

んすや山のような荷物を運び込んでいたそう
じゃ。女は避難させ、男が一人ずつ家の番を
していたそうじゃ。ところがこの水の流れ
道となり、家を押したそうじゃ。一軒の
家で番をしていたのは三十ぐらいの男で、泳
いで逃げて助かったそうじゃ。もう一軒の番
をしていたのは老人で、逃げ出さないうちに
家が流されたが、幸いにも柳の木に捕まり、
胸まで水に浸かりながらも助かることができ
たそうじゃ。

ち 水 の 土 ま ヤ に て 八
家 が 瓶 を で ア あ 話 月
か 入 や 取 水 シ っ し 八
ら っ 瓦 る が ヤ た て 日
少 て を 場 流 ア ん く 日
し く を 所 れ シ じ れ 、
下 る べ さ 込 ャ や た 比
流 の 、 え む ア ° ん 良
で を 長 な 頃 と 日 村
堤 防 持 かつ 越 暮 の
防 い の た は え れ 橋
が だ よ そ 、 始 頃 守
あ そ う そ 土 め か 太
っ う な そ 俵 たら 蔵
と じ 物 ま じ や 作 水 家
い や ま で や ろ 堤 が 堤
う ° 置 商 ほう 防 防
間 そ い 売 う 防 の
に の いて 物 に も シ 上
百 う て 物 も 家 シ 来

二十間（約二百二十メートル）に渡り決壊し、
そこから川の水が流れ込んだおかげで太蔵の
家は流されずに済んだそうじゃ。水は一晩二
日で引き、稲に影響はなかったそうじゃ。比
良橋は中ほどの二間（約三・六メートル）を
除いて水をかぶり、橋の上に盛った土は洗い
流され、橋桁も流されてしまったそうじゃ。
そのうち流れた根引きの松などが橋に引っ掛
かったのので橋は反って落ちてしまいい、そのま
ま流されて行っただけじゃ。その流された比

良橋が今度は平田橋に引っ掛かり、平田橋も
その下流の新川・土器野新田の橋もろとも流
されたそうじゃ。ただし新川通砂子橋は昼七
ツ（午後四時）頃にはもう流れ落ちていたそ
うじゃ。橋の修理にはしばらく時間が掛かる
とのことじゃ。砂子橋は知多郡まで流され、
藪村の浜辺に置いてあったそうじゃ。
御普請方の受け持ち場所では六十四ほどの
決壊箇所があつたそうじゃ。二十二日容膝居

士が話してくれたことじゃ。これほど大きな被害の庄内川の洪水も、木曾川ではたいしたことがなかったそうじゃ。二十九日夜の様子を北方村より一里（約四キロ）上流の光明寺村からやって来た百姓が話してくれたんじゃ。いったん七合までなった尾張側の水はすぐに引き始め、翌朝には普段と変わらず安心してたそうじゃ。そうじゃ。堤防が半分えぐられた箇所があったそうじゃ。当時川は美濃寄りを流れており、堤防に当た

る水の勢いが強かったからだそうじゃ。もう
少しで堤防は決壊するところだったそうじゃ。
堤防が決壊すると加納辺りから西の村々まで
水が流れ込む恐れがあるので、大垣・加納・
切通し・笠松の四役所の立会いで、急いで自
普請へ百姓が費用を出して行う工事を行
ようだと聞こえてきたそうじゃ。普通は公儀
の指図で御普請へ領主が費用を出して行う工
事を行わずの場所ではあるが、江戸と連
絡を取り合ううちに洪水となつてはいけな

ので、まずは工事を急いで行い、被害を防ぎ
ながら江戸へ報告しようとして申し合わせたそう
じゃ。近年川は美濃寄り流れ、尾張寄りは
河原となっており、そこに松や杉を植えて林
とすることがはやつていたそうじゃ。今では
二十年・三十年の林となり、どんな洪水にも
流されることはなかったそうじゃ。林となつ
た場所では水がよどみ、泥や砂が流さず、
洪水の度に砂や泥がたまり山のようになつて
いたそうじゃ。我先にと木を植えるので流れ

はせき止められて自然と美濃寄りとなり、堤
防が傷む場所は多くなり、その上この林のせ
いで水がよどんで流れが悪くなり、水かさ
が増すようになった。その証拠に
木曽川の中島小網に住む坪内氏の領民たちは
家の中まで水が流れ込むので水が漬いた高さ
に印をつけ、そこまで盛り土をして小屋を建
てていたが、その小屋にまで水が入るぐら
い水は増えていて、川幅まで
木を植えたため、にできたよどみが原因だそ
う

じゃ。これでは美濃の人々は心配であろうと
話していたそうじゃ。
思うが、木曾川通り御普請奉行勤めだったと
は、川中に柳を植えることも背の高い草を茂
らせることもなかったじゃ。毎年秋には下
刈改として、堤防の道に荊棘（けいきよ）
とげのある低木（）が茂らないように十分な金
を払って竹木までも全部切り払っていたんじ
や。ある時、北方村から川上の広い河原に柳

を 植 えて 育 て よ う と し た こ と が あ っ た が 、 当
時 の 奉 行 職 は こ れ を 許 さ ず 、 全 部 切 り 払 わ せ
て し ま っ た ん じ ゃ 。 昔 は 松 や 杉 を 植 え る こ と
は 許 さ れ ず 、 光 明 寺 村 川 上 の 村 々 か ら 堤 防 の
上 を 行 く と 、 美 濃 側 の 堤 防 ま で 見 渡 す こ と が
で き た ん じ ゃ 。 し か し い つ の 間 に か へ お そ ら
く 文 政 天 保 以 来 の 悪 習 、 御 普 請 奉 行 が 職 務 を
怠 っ た わ け で は な い が 、 こ の 辺 り が 犬 山 領 ・
今 尾 領 の 入 会 地 で 成 瀬 家 ・ 竹 腰 家 の 権 威 に 押
さ れ 、 そ れ ぞ れ が 自 分 の 利 益 の た め に 行 っ た

植林ではあるが、奉行は口出しをしなかつた
んじや。そのため川沿いの村々は我先にと木
を植え始め、二・三十年のうちに木が茂り丘
のようになつてしまつたんじや。美濃国に尾
張藩領がなければよいが、どちらにも御領下な
ので不公平を生じるばかりか、尾張側でもよ
どがひどくなり、いつ何時堤防が決壊するか
分かつず、とても恐ろしい事になつていたん
じや。職務を全うすることが難しいご時勢か
もしれんのじや。

八月四日夕方、御殿様が鷹狩という名目で
福德三郷（福德・中切・成願寺）の被災場所
を直々に見回られたそうじゃ。人々が大変困
っているので、修復工事を急ぐよう御普請奉
行を始めその担当に命じられたそうじゃ。こ
の話に嘘偽りはないようで、堤防の修復工事
のため御普請奉行筆頭の渡辺喜八郎が三郷に
詰めたそうじゃ。通りの橋は落ちてしまっ
いたんじゃ。この役所へは次から次へと仕事
が持ち込まれ、大変な忙しさだったそうじゃ。

この三郷での仕事は、賃金が当日払いだった
そうじゃ。洪水に人々は苦しみ、城下の家ま
で助けを求めてやって来ていたそうじゃ。そ
の中には偽者もまぎれていたそうじゃ。雇っ
ている長八の家に、綿服ながら羽織を着て、
肩からは一貫ほどの銭が入っているように見
える調度袋（銭を入れる財布）を掛けた男が
やって来たそうじゃ。水害に遭って困ってい
るのでぜひ助けて欲しいと言っていたそうじ
ゃ。長八が出て行き、我が家を選んでいただ

いたのはもったいないことだが、あなたの使
用人と変わらない暮らし向きの我が家へ現れ、
そのような立派な身なりで助けを求められて
も見合うような物や力を持つていないと断る
と、立ち去ったそうじゃ。間もなくして大代
官より、百姓が町人の助けを受けるのは恥ず
かしいことなので今後は工事に働きに出て錢
を稼ぐようにとされたんじゃ。これ以降、賃
金は当日払いとなり、洪水に遭った者は男女
を問わず働かせたそうじゃ。

友 人 か ら 架 け 直 し て 間 も な い 中 山 道 大 井 宿
阿 木 川 の 橋 が 流 さ れ た と 聞 い た ん じ ゃ 。

と こ ろ で は 必 要 な 費 用 を 削 っ た の で 、 新 し い
橋 に も か か わ ら ず も ろ か っ た の で は と 話 し て
い た そ う じ ゃ 。

の 屋 敷 は 東 白 山 よ り 北 へ 入 っ た 東 側 で あ る 寺
の 裏 だ っ た が 、 洪 水 で 汚 物 ま で 流 れ 込 み 、 大
変 な 目 に あ っ た と 話 し て い た そ う じ ゃ 。

で も 同 様 な 目 に あ っ た 場 所 が 沢 山 あ っ た そ う

じゃ。車道辺りでは家の土台ぐらいの水で済んだとのことじゃ。

八月十七日、次官筒井清房が話してくれたことじゃ。七月二十九日申刻（午後三時）頃、急に家の周りが騒がしくなり、隣の家から名塚村の堤防が決壊したので用心しろとの声がやたらと聞こえてきたそうじゃ。どうやら古柳町周仙寺の僧が北の方でする水音を聞きつけ、洪水かと心配になっって外へ出ると、水が

くるぶしまであるのに驚き、名塚の堤防が決
壊して水が来ると叫んでいたのが、段々と南
へと伝わったのだと後で知ったそうじゃ。ど
うやら福德三郷へ流れ込む水音を勘違いした
ようじゃ。これは大変だと押入れの古着物な
どを荷造りしているうちに日は暮れ、水が流
れて来ることはなかった。そうじゃ。どうやら
堤防の決壊はなかったようじゃ。堤防が決壊
し、水が流れ込んでいれば必ず家の軒まで水
に浸かったとのことじゃ。水屋（避難場所）

を建てようかと大騒ぎしたが、慣れないこと
でその心得もないと話していたそうじゃ。

乙卯（安政二年）八月二十日未刻（午後一
時）より東風が吹き始め、申上刻（午後三時）
には激しくなり、その後中刻（午後四時前）
には静まったんじや。その日は高潮もあつた
んじや。そもそも今月に入つて曇りや雨の日
が多く、湿り気が多かつたんじや。十七日夜
から降り始めた雨は二十日になつても降り続

も 外 止 や ら た 会 は ぎ い
響 に め ° く の っ 大 、 て
か 出 た 股 す で て 事 晴 い
ず た と 立 る 東 い な れ た
、 ん こ へ と 風 る 用 間 ん
風 じ ろ も 人 が と 出 も じ
が や ー も 々 強 、 あり そ や
強 さ を だ は い こ 側 官 う そ
い す 高 ち 退 窓 舎 な れ
こ が く ・ 出 の の 配 だ
と に し 、 の 障 子 出 じ も
に 御 膝 両 側 の 障 子 が て や 昼
も 殿 の ま 側 の 障 子 が 御 っ 頃
気 中 く の 開 き を 吹 殿 た は
付 の り な き を 飛 同 で 雲
か 中 な ど を 縫 僚 同 日 薄
な で し て い じ ば れ に 日 ら
か 物 縫 い じ ば れ に 日 ら
つ 音 て い じ ば れ に 日 ら
た 音 て い じ ば れ に 日 ら

んじゃ。ひとまず走って官舎に戻ったんじゃ。
風雨が弱まるのを待っていたが、建物がきしむほどになったんじゃ。家のことが心配になっ
て官舎を出ると、太さが一尺（約三十センチ）ほどの杉の枝が折れて落ちてくるのが見
えたんじゃ。大下馬まで来ると傘が吹き上げられ、広げることもできず、畳んで持っ
ていているだけだったんじゃ。頭から雨と風を受け、全身ずぶぬれになりながら家へた
どり着いたんじゃ。若宮の前辺りから一段と

風雨が強まり、東側の家では瓦が吹き飛ばされ、
れ、まるで木枯らしで木の葉が吹き飛ばされ
るようだったんじや。橘町大木戸を過ぎる頃
には更に風が激しくなつたんじや。その上、
雷の音まで聞こえてきたじや。古渡の一里塚
辺りでは藁屋の棟にかぶせた雁振瓦と言う大
瓦でさえも吹き飛ばされていたんじや。草ぶ
きの屋根が吹き飛ばされた家も多かつたんじ
や。何とか家までたどり着くことができ、申
半刻（午後四時）頃には風も治まつたんじや。

高 流 ほ や で は の 屋 と そ
潮 さ ど ゃ 、 入 東 敷 じ の
を れ の 尾 下 なら 側 には や 頃
防 て の 頭 町 な 杓 役 は つ 、
ぐ 来 大 橋 橋 南 通 所 潮 が た 堀
こ た は 南 通 御 押 古 川
と 白 船 まで 門 し 渡 の
が 鳥 は 乗 る こ う へ 橋 水
で の 流 さ り と じ も 寄 橋 は
き 材 され 入 が 潮 が せ の あ
た 木 れて れ や 。 推 流 北 ふ
そ が 横 て 通 り 押 西 れ
う 引 を い でき な 寄 し 込 そ
じ つ 向 た かつ も せ 込 ろ う
や 掛 き 七 一 せた み 、 今
。 かつ 、 そ 百 面 したが 古 尾
川 った そ 石 水 中 渡 藩
の た の 積 う 浸 橋 の 蔵
水 の で み じ し に 南 の
は で へ み じ し に 南 の こ

船の北側で二尺（約六十センチ）低く、南側
では二尺高かった。ので、水は南側西の堤防を
五女子の方へ越え、材木と船四艘を田へ流し
込んだ。そうじゃ。翌日御役人が調べにやっ
て来て材木に木口印を押し、誰も手を触れな
いよう申し付けた。そうじゃ。高潮は昼八ツ半（
午後三時）頃で、どうやら海水が強風に吹き
上げられたもの。ようじゃ。南の方角で朝か
ら太鼓のような音がしていた。そうじゃ。とこ
ろで、御船蔵には常番の御水主（かこ・船乗

り）三人が三軒の家に住み、一角には役所土蔵や御腰懸（詰所）もあったんじや。この日は御船の修理のため、多くの御水主が集まつており、昼過ぎからの強風に用心して御船を御蔵から引き出し、陸につないであつたんじや。一休みしているところ、あつという間に潮が乗り上げたんじや。全員で御構内を手分けし、て片付けようとして外に出ると、最初は膝ぐらいだった水の深さが腰、胸となり、最後に足も届かないほどになつてしまつたんじや。慌

てて高い場所まで泳いで逃げたんじゃないや。御腰
懸が一番高い場所だったのが、床の下壁の中ほ
どまで水がついたんじゃないや。二番目に高い場所
にある役所でも縁側の上まで水が漬いたんじゃない
や。役小屋は特にひどく、床上二尺へ約六十
センチまで水がついたが、その後引き始め
てすぐに六寸へ約十八センチほど下がった
んじゃないや。その後また二、三寸へ約六
ちう上がったが、すぐに引き始めたんじゃないや。
その頃に御船奉行千賀氏が出向いて来たんじゃない

高潮は宮駅へ流れ込み、浜の鳥居の下では深
や。大急ぎで浜までやって来たが、木の芽（
免）渡しなどでは船をつないであつた綱が吹
き切られ、船が流されており渡ることはでき
なかつたんじゃない。供をする御水主が走り回っ
て陸に引き上げてあつた伝馬船一艘を借り出
し、漕いで御船蔵に入つたんじゃないや。天明（一
七八一）一七八九）だつたかの高潮よりも四、
五寸（約十二）十五センチ）も高かつたんじゃない
や。しかし、怪我人はなかつたんじゃない。この

さが人の背丈にもなったそうじゃ。御殿御役
所にも潮が流れ込んだが、床上まではならな
かったんじゃ。神戸中道辺りや伝馬町本陣前
辺りまで潮が流れ込み、そこから先では白波
が立っていったんじゃ。築出町一里塚辺りか
東では翌朝になっても水が引かなかったんじ
や。新田にも水が流れ込み、八丁縄手では胸
までの深さになっただんじや。船方新田で
は御船蔵前南に小さな懸廻堤（かけまわし）
つみ・下流からの浸水を防ぐための堤防）が

あ　　っ　　た　　ん　　じ　　ゃ　　。
田　　を　　作　　り　　、
ま　　れ　　た　　の　　で
え　　て　　し　　ま　　っ　　た　　ん　　じ　　ゃ　　。
し　　寄　　せ　　て　　新　　し　　い　　新　　田　　に　　水　　が　　流　　れ　　込　　み　　、
田　　に　　も　　水　　が　　入　　っ　　て　　し　　ま　　っ　　た　　ん　　じ　　ゃ　　。
重　　堤　　が　　あ　　れ　　ば　　と　　悔　　や　　ん　　だ　　が　　、
た　　ん　　じ　　ゃ　　。
と　　百　　石　　の　　中　　船　　三　　艘　　が　　流　　れ　　入　　り　　、
っ　　て　　海　　へ　　と　　戻　　っ　　た　　が　　、
大　　船　　は　　奥　　深　　く　　ま　　で　　流　　れ

入り、翌日には田畑の中で横倒しになつてい
た。うじゃ。地面を掘つて船を出すには船を
作るぐらい費用が掛かるとのことじゃ。熱田
前新田は辰巳（南東）の方角から水が流れ込
み、堤防には松が少し残つていたので、まる
で島が浮かんでゐるようだった。そうじゃ。そ
の両側およそ六十間（約百十メートル）が崩
れ、水が流れ込んだ。水が流れ込んだ
だ先に御川番奥御中間小屋があつたが、御川
の魚は高潮の塩分に目をやられ、みんな死ん

でしまったそうじゃ。二、三尺（約六十〜九十センチ）もある鯉がたくん上がつていたが、この鯉に目を付けろ者はなく、三日ほどすると腐つてしまつた。西にある新田にもことごとく水が流れ込み、特に八穂新田では堤防が跡形も無かつた。そうじゃ。ここに貧しい寡夫が十一歳と七歳の子どもと住み、家の二階で戸板に袷（あ）わせ・裏地のある着物（もの）を敷いて寝ていた。んじゃ。父親が沖から流れてくる木を拾ひに出掛け留守にしている。

間　　に　高　潮　が　家　を　浮　か　せ　て　流　し　出　し　た　ん　じ　や　。
夜　　に　は　強　い　西　風　に　吹　か　れ　、　知　多　郡　常　滑　村　の　浜
辺　　に　流　れ　着　い　た　ん　じ　や　。
子　　ど　も　に　気　付　き　、　起　こ　し　て　外　に　連　れ　出　し　「　ど
こ　　か　ら　来　た　者　か　」　と　尋　ね　る　と　、　「　八　穂　新　田　、
こ　　こ　は　ど　こ　」　と　尋　ね　返　し　て　き　た　ん　じ　や　。
滑　　だ　」　と　教　え　る　と　「　住　ん　で　い　た　八　穂　か　ら　は　遠
い　の　」　と　尋　ね　る　の　で　説　明　す　る　と　、　驚　い　て　泣　き
出　し　、　そ　の　姿　が　か　わ　い　そ　う　だ　と　村　人　は　も　ら　い
泣　き　を　し　た　そ　う　じ　や　。
今　も　そ　こ　で　育　て　ら　れ　て

いるとのことじゃ。どうして無事で済んだか
は分からないが、もしかすると神が守ってく
れたかもしれないのじゃ。

二十二日、御普請奉行二人が宮から東西新
田の被害状況を調べに出掛け、たそうじゃ。西
は次席の石川弥兵衛が担当したそうじゃ。受
け持ちには熱田から長島の先まで広い範囲だっ
たそうじゃ。東は伝馬から天白川の河口まで
と狭かったたそうじゃ。こちららは筆頭服部喜八

郎の受け持ちだったそうじゃ。どうして筆頭
に樂をさせるのかと尋ねたそうじゃ。この前、
三郷詰から御勘定奉行小池良次郎の屋敷へ出
向いた際、面談の最中に具合が悪くなり、疳
疔（かんせん・腹の痛み）とも言われていた
そうじゃ。倒れそうになり、その後も気分が
すぐれないようだが、大変な時なので駕籠に
乗ってでも出掛けると言うので、範囲を狭く
したそうじゃ。

二十三日、御側大寄合衆田宮弥太郎殿が船を借り受け、堀川から新田の被害箇所を視察に出掛けたそうじゃ。供をするのは御勘定吟味役一人・同物書一人、御船手御水主十一人、雇水主十三人の二十四人じゃ。総勢では四十人を越えたそうじゃ。小早と言う船で、櫓の数には二十丁だそうじゃ。高欄も付いていたそうじゃ。うじゃ。御目付衆に中根帯刀と言う者がおり、最近各地を見回っていたそうじゃ。その中根が今回新田も見回ったそうじゃ。

二 十 五 日 、 新 田 へ 米 を 振 る 舞 う た め 、 古 渡
下 市 場 か ら 二 十 人 ほ ど で 出 掛 け る 計 画 が あ っ
た ん じ ゃ 〇 町 で は 最 近 こ の よ う 行 い が は や っ
て お り 、 そ れ が 南 へ と 伝 わ っ て 来 た ん じ ゃ 〇
宮 の 浜 か ら 一 、 二 里 へ 約 四 キ ロ 〽 八 キ ロ 〽 と
近 い 新 田 に は 沢 山 の 品 が 持 ち 込 ま れ て お り 、
飯 だ け で な く 鰯 節 ・ 梅 干 ・ ぞ う り ・ わ ら じ ま
で 持 ち 込 ま れ 、 小 屋 は 物 で あ ふ れ て い た ん じ
や 〇 こ れ で は 食 べ 切 れ ず 、 腐 っ て し ま う の で

飯は堤防に干していたんじゃ。大黒の脚に味
噌（有り余るほどある所にはさらに物が集ま
る）の例え通りなので、もつと遠くへ持って
行き、人のやって来ない場所で振る舞っては
どうかと相談していたそうじゃ。それはもつ
ともと、下市場町の二町、上ノ切と下ノ切が
寄付を募ると、米が一石二斗、錢が五百貫文
も集まったんじゃ。これを飯にして二十人ば
かりで運び、二十六日一日中茶屋新田辺りを
回ったんじゃ。その辺りは宮の辺りと違い、

朝に粥をすすったきり何も食べていない者が
多くおり、困っている所をちゃんと助けてく
れるのはとても有り難いと言われたんじゃ。
ただし、村に入る際は番人が村境まで出迎え
に来ており、施し物かと尋ねるので、そうだ
と答えるのと庄屋の家へと案内されたそうじゃ
荷物はその中で困っている人たちに分け与えら
れたとのことじゃ。最近はやその村からやつ
て来て、嘘をついて途中で荷物を横取りしよ
うとする者もいるので、こうして防いでいる

あ　　田　　面　　高　　辺　　買　　じ　　服　　紛　　と
　　つ　　に　　出　　潮　　の　　い　　や　　や　　れ　　の
　　た　　入　　来　　で　　新　　あ　　。　　家　　、　　こ
　　村　　植　　な　　修　　田　　さ　　新　　財　　船　　と
　　や　　し　　い　　復　　は　　っ　　田　　を　　で　　じ
　　耕　　て　　商　　工　　な　　て　　は　　積　　や　　や
　　地　　い　　人　　事　　か　　い　　手　　み　　っ　　。
　　―　　る　　も　　な　　っ　　堅　　込　　て　　そ
　　の　　百　　た　　ど　　た　　い　　ん　　来　　れ
　　百　　姓　　く　　に　　ん　　で　　て　　以
　　姓　　は　　さ　　金　　じ　　、　　は　　外
　　で　　、　　ん　　が　　や　　。　　商　　に　　も
　　分　　元　　い　　か　　し　　人　　が　　助
　　家　　は　　た　　か　　し　　が　　け
　　し　　古　　そ　　り　　持　　金　　に　　け
　　た　　田　　う　　、　　主　　を　　押　　に　　に
　　者　　へ　　じ　　、　　で　　入　　来　　来
　　な　　昔　　や　　。　　な　　り　　た　　者
　　ど　　か　　。　　を　　工　　の　　海
　　で　　ら　　新　　工　　の　　の

あ　　つ　　た　　が　　、　　こ　　の　　洪　　水　　に　　懲　　り　　て　　故　　郷　　へ　　帰　　り　　た　　い
と　　願　　い　　出　　る　　者　　も　　多　　く　　い　　た　　そ　　う　　じ　　ゃ　　。
は　　海　　辺　　の　　家　　々　　に　　水　　が　　流　　れ　　込　　ん　　だ　　そ　　う　　じ　　ゃ　　。
三　　河　　国　　矢　　作　　川　　も　　、　　七　　月　　二　　十　　九　　日　　の　　洪　　水　　で　　橋
が　　流　　れ　　落　　ち　　、　　流　　れ　　落　　ち　　た　　橋　　は　　篠　　島　　へ　　流　　れ　　着　　い
た　　そ　　う　　じ　　ゃ　　。
矢　　作　　川　　河　　口　　西　　の　　大　　浜　　村　　へ　　流　　れ　　着
い　　た　　と　　も　　言　　わ　　れ　　て　　い　　た　　ん　　じ　　ゃ　　。
ど　　う　　や　　ら　　長　　い

橋だっただけでばらばらになり、あちらこちらに流れ着いたのかもしれんのじゃ。八月二十日の大風高潮は大浜村も襲い、海岸では家八、九軒が流されたそうじゃ。それ以外の被害は無かったと大浜村から戻った宮宿の者が話していたそうじゃ。

前新開へ向かうと、南の堤防が崩れて夕方、れ立って木ノ芽渡しから船に乗り、熱田築地九月一日快晴じゃった。息子の友次郎と連

潮が押し寄せ、家の中にまで水が流れ込む様
子が見えたんじゃない。引き返すと、戌亥（北西）
の船方新田は、八重堤を崩して平らにしたた
め潮が流れ込んでいたんじゃない。池のよう
でもたくさん流れ入り、水に浸かった畑にも魚
がいるようにじゃった。この新田の広さは八町
三畝（約二万四千坪）ほどあり、田は少なく
畑が多かったそうじゃ。その後熱田新田を眺
めるのと、辰巳（南東）辺りから水が流れ込み、
堀川も海も一面水があふれていたんじゃない。稲

は泥だらけになったが、潮の引く間に刈り取
って米を収穫していたんじゃないかにも粒は
小さいが食べることはできたんじゃない。物を探
しに田に出ている人々は、落ちていている物なら
何でも拾い歩いていっているように見えたんじゃない。
この新田の堤防の上に藁葺きの小屋が建って
おり、まとい、のぼりやちようちんをあげて
いたんじゃない。そこは支援の品を受け取る場所
だったんじゃない。この日、神谷喜左衛門（馬廻
り百石）が家にやって来たので話を聞くと、

神谷の領民二人も新田に入植していたそうじ
や。元々土地持ちの百姓ではなかったそうじ
や。こうして新田へ入植した者は財産を築き、
土地持の百姓となつて豊かな暮らしを送つて
いたが、この洪水や高潮で新田が恐ろしくな
り、故郷を恋しがつているそうじや。ただし、
喉もと過ぎれば何とやらあの教えの通り、堤防
の修復が終わつて潮が田や家に流れ込まなく
なれば、この気持ちを忘れるのは人の世の常
じや。

聞いた話じゃ。堀川からあふれた潮が流れ込
んだ田二十一町（約六万三千坪）の内、肥え
た土地の田では穂頭が垂れて水に浸かり、実
が入らず、やせた土地の田では穂先が軽くて
実が入ったそうじゃ。熱田新田の決壊箇所
の深さは八丈（約二十四メートル）にも及ぶ
と言われている。いたそうじゃ。

菊月（九月）十一日、古渡鼓町（古渡橋の
西詰めを北へ向かった所、東に堀川、西に江
川がある）に住む柚へそま・材伐業や造材業）
の佐兵がやっつて来たので、二十日の高潮の際
家の辺りがどんな様子だったか尋ねてみたん
じや。佐兵が言うには、高潮だと聞いた時、
西の江川では水が上流に向かって流れており、
水があふれ出たら屋根に上ろうと梯子を用意
し、様子を窺っていたそうじゃ。離れ島に水

が流れ込んで材木が流れるほどで、「みんな
出て来い、みんな出て来い。」と叫び続ける声
に、日雇いの者たちにとつて木場は得意先の
旦那だったのので走り出したそうじゃ。すると
古渡橋少し南から西の堤防は、水が西の田に
向かって滝のよう流れ落ち、材木や船など
を西へと押し流す水の勢いは、深さは膝の上
か股の下ぐらいだが、鬼熊と呼ばれる者ども
でさえ怖がつて渡る者がいないぐらいだっ
そうじゃ。ようやく潮が引いて水も治まっ
た

ので、夜になつて、火をともし、西の田に浮
かぶ材木を集めに船で出かけたそうじゃ。水
の深さは稲穂の首ほどで、その上で木を引き
集めたので稲穂を傷めることはなかつたそう
じゃ。江川が上流に向かつて流れていたのは、
堀川の高潮が佐屋街道に流れ込み、その間に
ある江川が一杯となり、水が北へ押し上げら
れたものだったそうじゃ。離れ島とは新橋の
西側上流の片側に家が立ち並ぶ辺りのことじ
や。

三十人ほどで出掛けましたそうじゃ。熱田新田前
田村殿の侍二人、中間四人ばかり、合
吟味役一人、物書一人、同心一人、目付一人、
ばかりだったそうじゃ。田宮殿以外に御勘定
てくれたんじや。船は小早で船乗りは二十人
視察に出掛けた際に供をした時の話を聞かせ
四日、御側大寄合衆田宮弥太郎殿が船で村の
やって来たので引き留めて話を聞くと、八月
その夕方、御水主岩鎗三郎が松茸を持っ

神宮寺新田辺りの一里半（約六キロ）の陸に
その夜は泊まったそうじゃ。御船手は船番を
し、翌朝早く出発したそうじゃ。飛島辺り・
稲荷先辺りで昼の休憩の後、船に乗ったそう
じゃ。西風が強く、波が船の中まで吹き込む
ほどだったそうじゃ。何とかその夜は横須賀
泊まりだったそうじゃ。浜に船を着け、食事
は全て船の中で用意したそうじゃ。米の飯に
赤味噌汁、漬物が二つばかりだったそうじゃ。
八穂新田の民家百十七軒（百二十軒とも）の

う ち 残 っ た の は 一 軒 で 、 百 十 六 軒 は 流 さ れ て
し ま っ た そ う じ ゃ 。 十 七 人 へ 本 当 は 十 三 人 と
も ー が 死 ん だ そ う じ ゃ 。 大 潮 の 時 に は 、 二 十
人 ば か り が 一 軒 だ け 残 っ た 家 の 屋 根 に 上 が り
助 か っ た そ う じ ゃ 。 そ の 屋 根 の 上 か ら 見 た 家
を 浮 か せ て 押 し 流 す 大 潮 の 激 し さ は 例 え よ う
が な か っ た そ う じ ゃ 。 八 穂 奥 の 西 新 田 の 中 を
仕 切 る 小 さ な 堤 防 を 大 潮 が 越 え 、 奥 の 古 い 堤
防 の 向 こ う 側 ま で 家 を 流 し 込 ん だ そ う じ ゃ 。
そ の 潮 が 引 く 勢 い が す さ ま じ く 、 潮 に 引 か れ

て流れ出る家の様子は目がくらむほど恐ろしかったそうじゃ。今は着の身着のまま、全て流されて失ったと話していたそうじゃ。御救金が下されると聞いたと話していたんじゃない。

安政二卯（一八五五）八月二十日暴風雨、夕七ツ（午後四時）頃、大波で新田に水が入ったとのことじゃ。

最後に被害の状況について書かれた部分を
書き出しておきますので参考にしていただけ
れば幸いです。

田。 八月二十日、大風高潮で潮が流れ込んだ新

長三郎新田、紀左衛門新田、戸部村新田、
笠寺村新田、本地村新田、水袋新田、甚徳新
田、南柴田新田、新宝新田（流死人二人）、熱
田前新田、神宮寺新田、宝来新田（流死人十

一人）、永徳新田（流死人七人）、藤高前新田、
小川新田、道德前新田、豊宝新田、当栄新田、
丹後江新田、又兵衛新田、又兵衛新々田、宝
生新田、南野村八左衛門新田、八左衛門新田
の繰出新田、熱田築地前新田（流死人二人）、
甚兵衛新田、稲富新田、大江新田
で、これは八月二十二日までに報告があつた分
とのこと。

安政二年乙卯（一八五五）八月二十日、大
 風雨夕七ツ（午後四時）頃に大きな高潮、こ
 の高潮で堤防が決壊し、水が流れ込んだ新田
 の様子。
 大代官支配（三十四ヶ所）、佐屋支配（八ヶ所）
 、鵜多須（五ヶ所）、北方（八ヶ所）、鳴海・横
 須賀（三十六ヶ所）
 安政二卯（一八五五）八月二十日大風高潮
 の被害。

	横								大
藪	須	大	熱	又	道	神	水	長	代
村	賀	江	田	兵	徳	宮	袋	三	官
	支		築	衛	前	寺		郎	支
浅	配	巾	地	同			甚		配
山		着	前	所	豊	宝	徳	紀	海
		亥	新	新	宝	来		左	辺
鬼			田	田			南	江	新
ヶ					当	永	柴	衛	田
崎			八	南	栄	徳	田	門	
			左	野					
大			衛	村	丹	藤	新	戸	
草			門		後	高	宝	部	
村				甚	江	前			
			同	兵			熱	笠	
加			所	衛		小	田	寺	
家			繰			川	前		
下			出					本	
								地	

だ								
場	右	中	古	松	上	苧	大	三
所	は	郷	場	奈	野	谷	里	多
。	い	村	村	村	間	村	村	歩
	ず				村			
	れ	東	常	坂		名	名	寺
	も	端	滑	井	小	和	和	本
	堤	村	村	村	倉	村	前	
	防				村			横
	が	利	熊	大		同	榎	須
	決	屋	野	谷	小	所	戸	賀
	壊	村	村	村	鈴	新	村	
	し				ヶ	田		扇
	、	久	高	家	谷		中	面
	水	村	場	倉	村	鍛	島	
	が		村	村		冶	村	樽
	流				西	屋		水
	れ		小	森	阿	村	平	村
	込		脇	村	野		井	
	ん		村		村		村	

	鳴			北		鵜		佐
有	海	鷺	早	方	飯	多	芝	屋
脇	支	山	田	支	田	須	井	支
村	配	村		配	村	支	前	配
			下			配	北	三
平		池	野		輕		新	稻
新		ノ	（		杓		田	
田		上	座		村			鍋
		村	）				朝	蓋
込			倉				日	
高		正	村					間
		木					八	崎
大		村	落				福	
高			合					芝
村		新	村					井
		立						前
		村	山					
			羽					
			村					

計
八
十
七
所

『松濤棹筆』六十四卷・六十五卷『名古屋
叢書第三編』第十卷所収を元に作成しまし
た。一部文章の順序を入れ替えた箇所や削除
した箇所がありますのでご注意ください。

謝辞

作成に当たっては、名古屋市博物館鈴木雅
学芸員、名古屋市蓬左文庫鳥居和之文庫長に
ご協力をいただきました。

二〇一八年十一月

編集

名古屋市
中川図書館